京田・太屋敷・日光畑遺跡発掘調査概報

1987

寺泊町教育委員会

序

昭和61年４月，８月の２期にわたって実施された京田・太屋敷・日光畑の遺跡確認調査が，大きな成果を挙げて，ここにその概報が刊行されますことに対し，深く敬意を表します。

先年４次に及ぶ発掘調査を行い県文化財にも指定された横滝山廃寺跡をはじめ，竹森周辺は古くから畑の表土や宅地造成のあとから，多くの土器や瓦片が出土し，貴重な遺物包蔵地として注目され，県の遺跡台帳にも登録されています。

近年急速な開発事業によって，土地改良や宅地化が進む中で，各地の遺物包蔵箇所が大きく変貌し，遺跡が破壊されていく傾向にあります。ここ京田・太屋敷・日光畑遺跡一帯もご多聞に漏れず，畑地改良事業が計画されていますが，これを拱手傍観すれば先人の文化遺産は荒らされ，郷土の歴史は日の目を見ることなく，土中に埋没したまま，千年の悔いを残すことになります。そのために，今回該地区改良予定箇所を中心に，先人の生活文化の跡を糺し，遺物遺構の内容や範囲を探って，その遺跡確認の調査を実施するに至ったのであります。

幸い，この調査で古い建物跡やその廻りを囲っていた堀に似たような多くの遺構が確認され，収集された布目瓦や土器類からも，８世紀初頭前後の白鳳期における寺院跡と検証された横滝山廃寺跡の同時代の遺跡であることが推定されました。畑地改良事業に伴う暫定的な調査でありましたが，古代史のロマンが大きく広がる中で，将来改めて本格的な発掘調査が行われ，郷土の古い歴史の解明が希求されます。

ここに本調査に寄せられた文化庁や県教育委員会のご指導，寺村先生，関先生はじめ調査団のご苦労，地主並びに耕作者各位のご協力に対し，深甚なる謝意と敬意を表する次第であります。

昭和62年３月

寺泊町長　中　島　甚一郎

例　　言

1．本書は，新潟県三島郡寺泊町大字竹森小字京田，太屋敷，日光畑所在遺跡における，昭和61年４月26日から４月30日の間実施した第１次発掘調査と，昭和61年８月16日から８月27日の間実施した第２次発掘調査の概要である。

2．本発掘調査事業は，新潟県三島郡寺泊町（町長中島甚一郎）に対する文化庁・新潟県教育委員会の昭和61年度文化財保存事業として行われたもので，寺泊町教育委員会（教育長廣田廣四）が実施したものである。

3．本事業は，発掘調査会（会長中島甚一郎）を組織し，寺泊町および発掘調査会が発掘調査団（第１次団長関雅之，第２次団長寺村光晴）に委嘱して行った。関係者・参加者は後記の通りである。

4．本書は，次の諸氏により分担執筆されたものを，寺村光晴がとりまとめ編集した。

なお，挿図は駒見和夫が，図版は関雅之，寺村光晴が作成した。

Ⅰ　駒見和夫

Ⅱ　寺泊町教育委員会

Ⅲ　(1)　関　雅之，駒見和夫　　(2)　関　雅之，駒見和夫　　(3)　駒見和夫

Ⅳ　駒見和夫

Ⅴ　久我　勇

Ⅵ　寺村光晴

挿図の方位は真北で示した。用語，用字は各執筆者にしたがい，あえて統一していない。

5．本発掘調査には，各方面から公私にわたり物心両面の多大なご援助を頂いた。ご芳名は本書中にできるだけ記させて頂いたつもりである。もし，失礼があったならお許し頂きたい。ここに衷心より厚く御礼を申し上げる次第である。

目　　次

序　　寺泊町長　中島甚一郎

例　言

Ⅰ　遺跡の立地と環境 …… 1

Ⅱ　発掘調査の経過 …… 4

（1）　発掘調査に至るまで…… 4

（2）　調査の経過…… 4

Ⅲ　京田遺跡…… 5

（1）　遺跡の概観と調査経過…… 5

（2）　遺　構…… 7

（3）　出土の遺物…… 13

Ⅳ　太屋敷・日光畑遺跡 …… 23

（1）　遺跡の概観と調査経過…… 23

（2）　太屋敷遺跡の調査…… 24

（3）　日光畑遺跡の調査…… 25

Ⅴ　京田遺跡と周辺の地名 …… 26

（1）　はじめに…… 26

（2）　京田遺跡周辺の地名…… 26

（3）　その他の地名…… 32

（4）　小　結…… 32

Ⅵ　結　び …… 33

あ と が き　　寺泊町教育委員会教育長　廣　田　廣　四

挿　図　目　次

第１図　遺跡付近の地形…… 1
第２図　京田遺跡周辺の遺物分布…… 2
第３図　京田遺跡周辺の採集須恵器…… 3
第４図　京田遺跡のトレンチ配置…… 7
第５図　京田遺跡第１地点…… 8
第６図　京田遺跡第１地点土層断面…… 9
第７図　京田遺跡第４地点…… 11・12
第８図　京田遺跡第５地点…… 13
第９図　京田遺跡出土瓦…… 14
第10図　京田遺跡出土土師器・土製品…… 16
第11図　京田遺跡出土須恵器（１）…… 17
第12図　京田遺跡出土須恵器（２）…… 18
第13図　京田遺跡出土古式土師器…… 21
第14図　京田遺跡出土石製品…… 22
第15図　京田遺跡出土砥石…… 22
第16図　太屋敷・日光畑遺跡のトレンチ配置…… 23
第17図　太屋敷遺跡トレンチ…… 24
第18図　太屋敷遺跡出土須恵器…… 24
第19図　日光畑遺跡トレンチ…… 25
第20図　京田遺跡周辺の地名…… 27・28
第21図　低湿地に囲まれる竹森集落…… 29

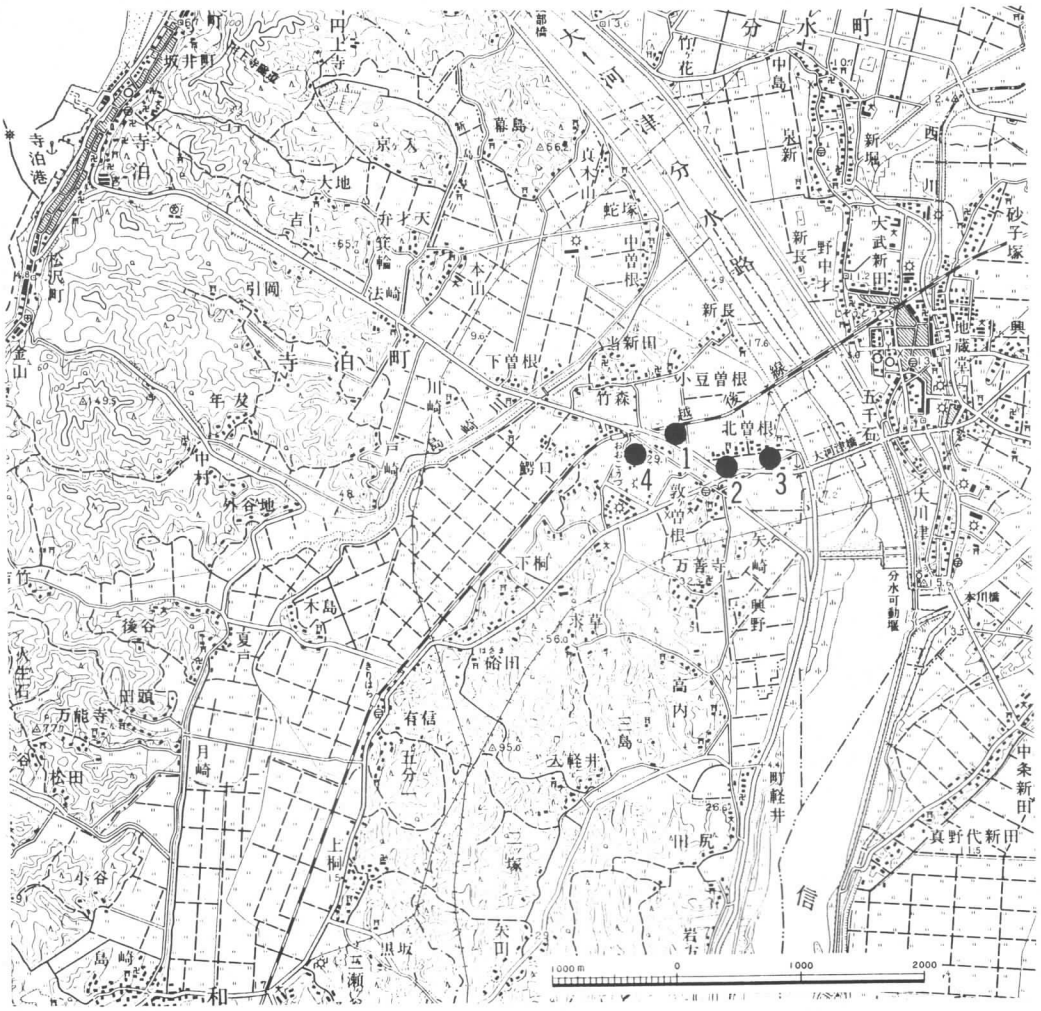
図　版　目　次

図版第一　京田遺跡全景
図版第二　１）京田遺跡　２）京田遺跡の発掘
図版第三　１）京田遺跡溝状遺構（SD 001，SD 002）　２）溝状遺構断面（同）
図版第四　１）京田遺跡第２地点　２）京田遺跡第３地点
３）京田遺跡土坑（SK 001）　４）京田遺跡布目瓦の出土
図版第五　京田遺跡第４地点
図版第六　１）京田遺跡第４地点土坑状遺構（SK 002）
２）同遺物出土状態
図版第七　京田遺跡第４地点溝（SD 004）
図版第八　１）京田遺跡第５地点（SB 001）
２）基壇状遺構（SB 001）南辺の東壁
３）基壇状遺構（SB 001）の南辺
図版第九　太屋敷遺跡全景とトレンチ
図版第〇　日光畑遺跡全景とトレンチ
図版第二　出土の遺物１（瓦・土師器・須恵器）
図版第三　出土の遺物２（須恵器・古式土師器・石製品・砥石・鉄滓・木片）

Ⅰ　遺跡の立地と環境

京田・太屋敷・日光畑遺跡は，行政上はそれぞれ新潟県三島郡寺泊町大字竹森字京田，同大字敦ケ曽根字太屋敷，同大字北曽根字日光畑に所在する。

これらの遺跡のある地は新潟県のほぼ中央の中越地方海岸寄りにあたり、海岸までの直線距離は約５～６kmである。中越地方には海岸に併行して，西山丘陵，島崎川，曽地（道山，小木）丘陵が雁行する。西山丘陵は本遺跡を海岸部と隔てるように，南は柏崎平野北端から東頸城丘陵へ，北は信濃川分水路を越え国上山・弥彦山へと連なる。これに併走する曽地丘



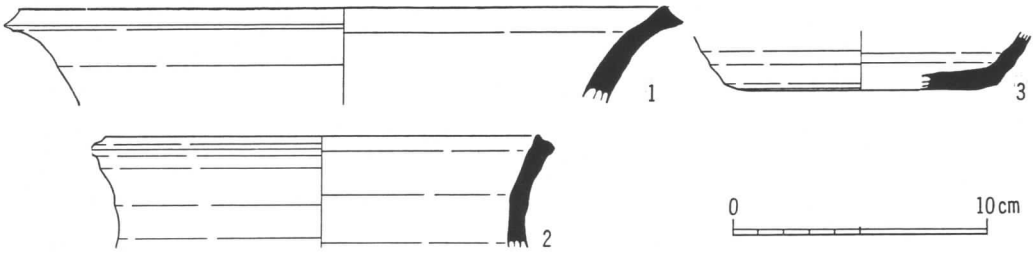
第１図　遺跡付近の地形

１．京田遺跡　　２．太屋敷遺跡　　３．日光畑遺跡　　４．横滝山廃寺跡

陵は，柏崎平野南縁に発して本遺跡の南側の横滝山を北端とする。曽地丘陵の東側は丘陵裾沿いに信濃川が北流し，その中・下流に広大な越後平野が展開する。西山丘陵と曽地丘陵の間を流れる島崎川は，大河津分水開鑿前は日光畑東側で信濃川に合流していたが，古くは旧円浄寺潟に注いでいたものと推察される。今日潟はなく，越後平野南部に続く細長い沖積地—中越平野—が広がる。中越平野は大正12年通水の大河津分水により湛水田の乾田化が果され、今日では肥沃な穀倉地帯となっている。しかし，往時は自然堤防と後背地，潟湖から構成されていたもので，現在も集落は自然堤防上に発達している。本遺跡もこのような自然堤防上や沖積微高地上に位置するものである。

第２図　京田遺跡周辺の遺物分布

● 須恵器採集地点 ▲土師器採集地点 ■ 瓦採集地点



第３図　京田遺跡周辺の採集須恵器

以上のような環境の下，本地域には縄文時代から歴史時代に至る間の遺跡が少なからず存在する。曽地丘陵北端に位置し京田遺跡を北東眼下に見下ろす横滝山廃寺跡は，４次にわたる発掘調査が実施された。その結果，木造基壇外装をもつ建物跡や，礎石抜き取り穴などの遺構，また鴟尾・塼仏・軒平瓦をはじめとする多数の瓦類や土器類の遺物が出土し，横滝山廃寺が本格的な古代初期寺院であったことが解明されている。この他にも古墳時代および歴史時代の遺跡が自然堤防ないし微高地状の低地に，一方円浄寺潟周辺の丘陵上や潟畔には，縄文・弥生時代の遺跡が位置している。

ところで，今回発掘調査を実施した京田遺跡の周辺でも，多数の土師器・須恵器などが採集されている。第２図は昭和60年夏に行った町史編さん事業にともなう横滝山廃寺跡周辺遺跡分布調査において遺物を採集した地点と，地元の方などが採集された地点を記入したものである。そこからもわかるように，付近はほとんどが水田でその合い間に畑がわずかに散在しており，畑では例外なく遺物が採集されている。その分布は，横滝山廃寺跡や京田遺跡の北側のかなり広範な地域にわたっている。第３図は分水町の内田昭一氏が採集された須恵器である。１・２の甕は京田遺跡の北約300ｍに位置する字「かんろくろ」の畑から，３の坏は京田遺跡東隣りの字「京田寄割」の畑からのものである。他の遺物も図示したものと同様，奈良・平安時代に属する。すなわち，横滝山の北方には広範囲にわたって，横滝山廃寺跡と併行する時期の遺構が水田下に眠っているものと考えられる。また，京田遺跡の北約150ｍ付近の畑では，玉作関係遺物の剝片が集中して多数採集されており，遺構の存在が予想される。横滝山でも同様の遺物が数点発掘されており興味深い。　（駒見和夫）

Ⅱ　発掘調査の経過

(1)　発掘調査に至るまで

横滝山およびその周辺（京田・太屋敷・日光畑）は，昔から「土器片」などが採集され埋蔵文化財包蔵地として注目されていた。

寺泊町では，すでに採集された鴟尾および「寺」と墨書した土器片の存在から，昭和51年・57年・58年・59年度と４次にわたり横滝山廃寺跡の発掘調査を実施した。その結果，木造基壇外装をもつ建物跡の検出や，塼仏片などが出土し，古代寺院の存在が明確になり，横滝山およびその周辺（京田・太屋敷・日光畑）遺跡の重要性が高まってきた。そのようななかで，昭和60年度に横滝山周辺遺跡分布調査が実施され，多数の土器片や灰釉陶器片等が採集された。これらの事実から，横滝山周辺遺跡についても横滝山廃寺跡との関係から，その性格の究明が待たれるようになった。

以上の状況の中で，京田地内において「畑地改良事業」が実施され，畑地の掘り起こし等が行われることになったため，急拠，県の指導を受けることになった。

昭和61年１月13日県文化財専門員国島聡氏の現地指導により，確認のため排水溝埋設箇所を中心に試掘調査を実施した。その結果，須恵器片等遺物多数と遺構と思われるものが確認されるにいたった。そこで，同年１月16日，県文化財主事岡本郁栄氏，土地改良区関係者，地主，施工業者，教育委員会関係者で調査の打合せをし，１月の試掘調査で確認された遺物・遺構について，その規模，性格および範囲を確認するため，試掘調査を実施することになった。調査は造成工期の関係から，４月中に実施したいということになった。

(2)　調査の結果

調査団編成について協議した結果，４月の第１次調査については，関　雅之氏（県立新潟高等学校教諭），８月の第２次調査については，寺村光晴教授（和洋女子大学）が発掘担当者となり実施することに決まった。第１次調査は次の通りである。

３月25日関　雅之氏，土地改良区関係者，地主，施工業者，教育委員会関係者で発掘調査について打合せを行なった。

発掘調査は４月26日～４月30日までの実質５日間で行う。調査員には本間信昭氏（新潟市立入船小学校教諭），調査補助員としては富田和気夫・岩崎　均（新潟大学学生）の両君にお願いすることになり，４月26日調査開始，４月30日に調査を終了する。

第２次調査は，８月16日に開始し，８月27日に終了した。　　（寺泊町教育委員会）

Ⅲ 京 田 遺 跡

(1) 遺跡の概観と調査経過

1）第1次調査

京田遺跡は横滝山廃寺跡から北東へ直線で約200mの位置にあり，図版第1・2図に示した如く，国道116号線と国鉄越後線にはさまれた三角地帯の畑地である。本遺跡は昭和60年末に畑地改良工事のため平坦に整地され，西側から農道および暗渠工事が開始されて，一部は地盤の掘さくと暗渠の埋設がなされた。県教育委員会は暗渠を埋設する部分の緊急発掘調査と遺跡の広がりを確認するよう町教育委員会を指導され，調査計画が立案された。

第1次調査は緊急を要する農道両側の暗渠埋設部分を発掘対象地とし，調査結果により埋設深度・埋設方法を関係者と協議することとした。調査は昭和61年4月26日から30日までの5日間実施をした。

調査地点は極めて近接しているが3地点あり（第4図参照）、第1地点は遺構の西端部にある南北の農道で，この農道の両側の暗渠埋設部にトレンチを設定した。トレンチの幅は約50cm，長さは南北30mとし，北側から2mごとに1区・2区……と名称を付した。農道の西側を第1号トレンチ，東側を第2号トレンチとしたが，この両トレンチに斜位にかかる大形溝が検出されたため，農道部分も約10mの間全面発掘を実施した。溝の東側で柱穴群が検出されたが，東への拡張は目的外のため断念した。第2地点は第1地点の農道から東へ70mのところにある南北にのびる農道の南側にあたる。

第2地点の農道は北側60mの部分に暗渠が埋設されており，そこから南にトレンチを設定し，農道の西側を第3号，東側を第4号トレンチとする。トレンチは幅50cm，長さ30mで，北側から1区・2区と名称を付ける。第2地点では東西方向に走る数本の大形溝が検出されたが，第1地点の溝とは根本的に異なり，溝からはほとんど遺物が検出されない。

第3地点は国道116号線寄りの南側に位置し，第2号トレンチと第3号トレンチの南端を結んだ線上の部分である。この部分は攪乱されたところが多く，幅50cm，長さ40mの第5号トレンチを設定し，北西側から2mごとに1区・2区と名称を付した。第5トレンチでは第10～第12区でピットが検出された以外に遺構は検出されていない。

遺物の出土状況については，第1地点の表土は削平され，約10cmの厚さで客土の黄褐色土が積み込まれ，2層の暗褐色土は10cmで須恵器・土師器・布目瓦・中世陶質土器が散漫的な状態で出土する。溝に多量の遺物が転落した状況も認められない。ただし，ピット（第1号トレンチ14～15区）SK001から多量の須恵器が検出された。第2地点および第3地点も土層の状態は近似しており，第1地点に比べて，遺物の出土量は極めて少なく，散漫な傾向が強くなる。その原因は各トレンチ幅が暗渠工事部分に限定していたため，約50cmとせまく，

遺構の平面的な広がり，遺物の出土状態を面として把握できなかったことによる。(関　雅之)

2）第2次調査

第2次調査は，第1次調査で検出された南北方向の溝（SD001）が第1地点の南側で西に曲がる可能性があったため，それにつづく東北方向の溝を検出する（第5地点）ことと，SD001の東側にそれに平行する南北方向の溝の検出（第4地点）を主目的とした。

発掘調査の方法は，SD001のほぼ延長線上にあたる発掘区の南端に基準杭（BM1）を設け，BM1より真北44mにも基準杭を置きBM2とした。BM1を基準点とし，この南北基線（磁針方位は西偏約7°0′）を中心として遺跡全体に3×3mのグリッドを設定し，このグリッドを併用した発掘区を設けた。なお，各単位グリッド（3×3m）は，アルファベットの1ないし2文字と数字の組み合せによって呼ぶこととした。つまり，BM1を基準点とし，東へE1，E2，E3・・・，西へW1，W2，W3・・・，南へS1，S2，S3・・・，北へN1，N2，N3・・・とした。また，3×3mの各単位の呼称は，その東南隅の交点で呼ぶこととした。例えば，W2ラインとN3ラインの交点を東南隅に持つ単位はN3W2である。

発掘調査は，昭和61年8月16日から8月27日までの間にわたって実施した。

8月16日　発掘調査の諸準備，再度現地における地主さん等との打合せ。

8月17日　関係者全員現地に集合。町教育委員会，調査会，調査団の詳細な打ち合せを行う。作物の作付・収穫期のため，発掘地点の選定に手間どる。

8月18日　グリッド法を併用して，第4地点では東西102m，第5地点では南北6.7mのトレンチを設定する。

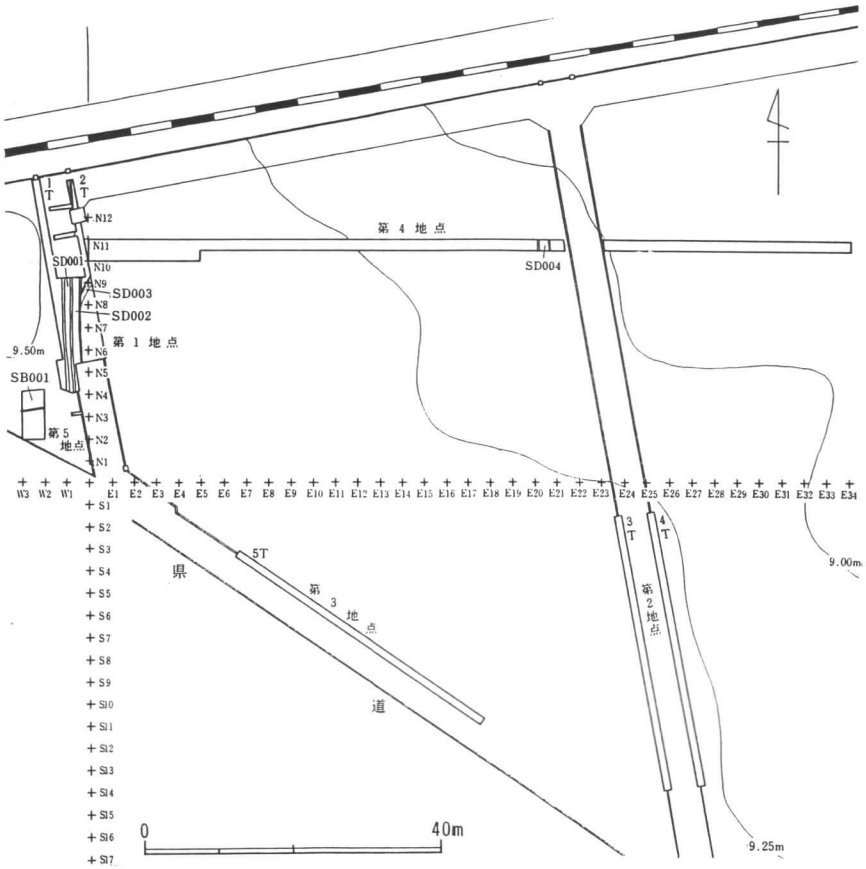
8月19日　設定したトレンチの発掘をはじめる。戦後土盛りが行われたということで，盛り土が固く厚い部分が多く，表土剝ぎに時間や人手をとられる。このため小型ユンボの使用について協議が行われる。

8月20・21日　トレンチの精査を行う。第4地点では南北方向と推定される溝を2個所で検出した。第5地点では当初に予想した東西方向の溝は存在しなかったが，基壇状遺構（SB001）を検出した。

8月22・23日　遺構の発掘を行う。第4地点では，前日にプランを確認したもののうち，一方は南北方向の溝（SD004）となったが，もう一方は土壙状の遺構（SK002）となった。第5地点ではSB001に沿って小溝（SD005）が検出された。

8月24・25日　発掘区の清掃とSB001，SD001，SD004等を主として発掘する。また，遺構および全景の写真撮影を行う。その後，遣り方測量により発掘区の測量を行う。

8月26日　埋め戻しの後，器材整理等の作業を行う。なお，埋め戻しに際しては遺構の保存と再発掘を予想し，浜砂を発掘区全面に敷くことにする。本日をもって発掘作業を完了する。



第 4 図　京田遺跡のトレンチ配置

8 月27日　残余の作業，整理作業等を行う。

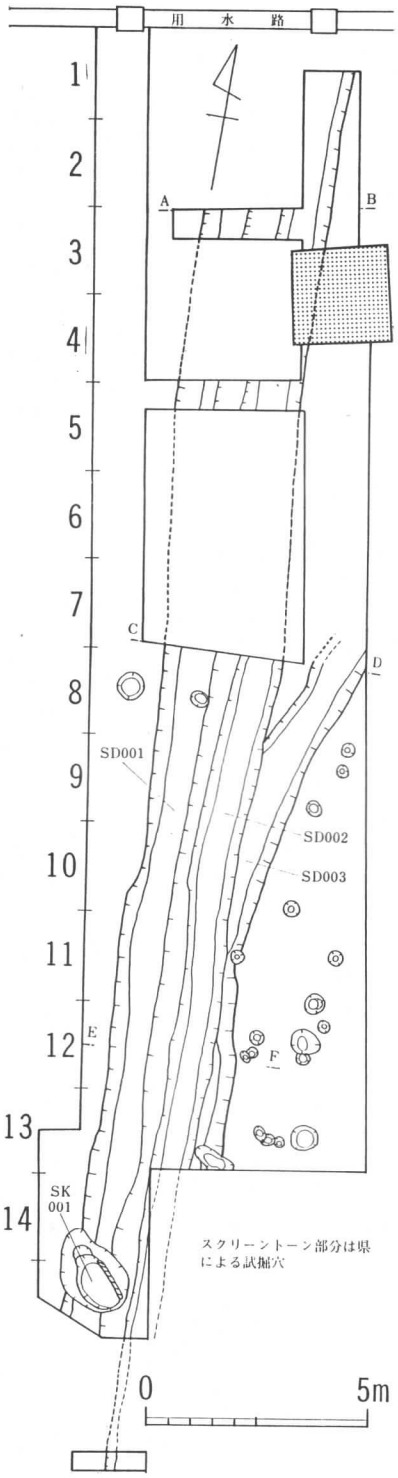
調査期間中，地元の方々や寺泊高等学校並びに大河津中学校の生徒諸君には，積極的な応援を得た。特に，生徒諸君，団員の大学生諸君の粉骨砕身の姿は調査遂行の大きな原動力となった。調査が順調に進み，多くの成果が得られたのも，一にこれらの方々の御協力の賜であった。心から感謝の意を表します。　（駒見和夫）

(2)　遺構

前述の如く，第 1 次調査は第 1 から第 3 地点までの 3 個所を調査した。この地点とは，便宜的に工事区分で分けたもので，地形様相を異にするものではない。旧地形は畑と東西に水田がある比較的平坦な地形であるが，遺跡の西端はやや高く東へ緩傾斜をなし，高低差は 1／200 であったといわれる。3 地点のうち，面として発掘したのは第 1 地点のみで，他は線としての発掘のため，遺構の全体を明らかにできなかった。

1）第 1 地点（第 5 ・ 6 図）

第 5 図は第 1 地点の遺構の分布と形状を示したものである。遺構はほぼ南北に走行する 2

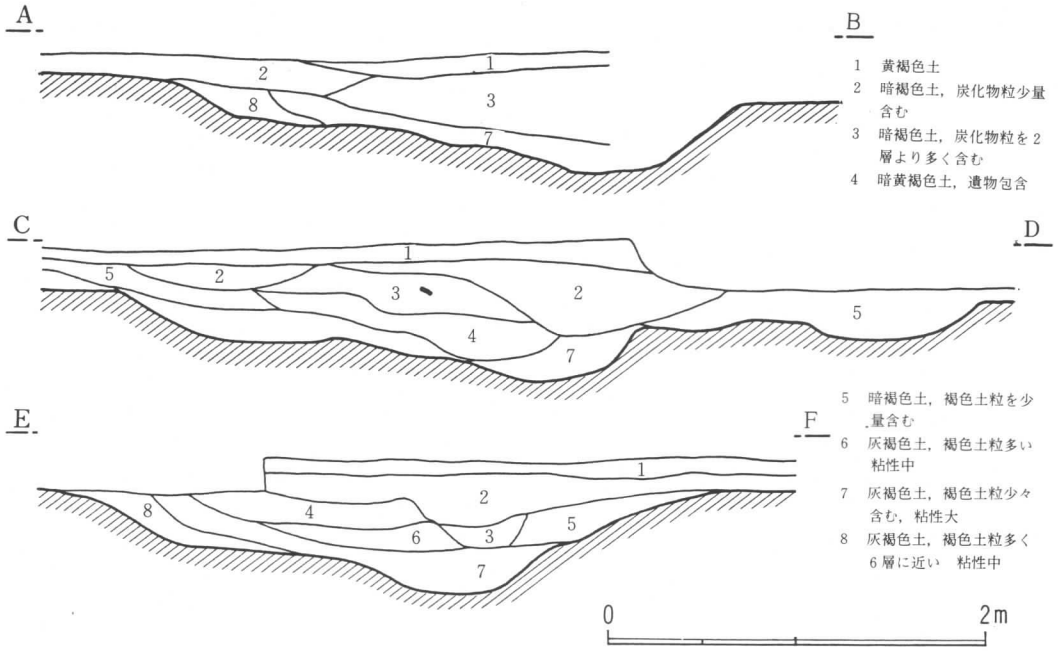


第５図　京田遺跡第１地点

本の大形溝と，第２号トレンチ８～11区で前者の溝と重複する北北東からの溝との３本がある。第１号トレンチ14～15区では，大形溝の西壁部に約２×1.4mの不整形をした土坑（SK 001）が存在した。他に大形溝の両側に柱穴様のピットが確認されている。

溝SD 001・SD 002　本溝が検出された当初は，１本の溝で西壁が二段となる形状のものかと考えたが，農道部分の全面発掘の結果，西側に浅い SD 001 の溝があり，この溝の東側にほぼ平行して更に深い SD 002 の溝が構築されたものであると考えるに至った。

SD 001 の溝は西壁がゆるやかな傾斜で落ち，溝底面との比高は平均30cmである。図版第３図下では，写真の左側溝が SD 001，深い部分が SD 002 で，SD 001 の溝底部と東壁への立ち上り部が土層の色調から確認できる。しかし，第６図の溝断面図には明確にあらわれず，溝底というよりは段状に近い形状である。溝の幅は東壁が SD 002 の構築で破壊されているため不明であるが，現存する段状部分を溝底とすれば推定幅 1.5～２m となる。これは最少限の幅として把握されるべきであろう。SD 001 の溝の方位は西側壁のラインで計測した結果，N－3°－Eを示した。この溝は第２号トレンチ３区まで確認され，国鉄越後線のさらに北にのびることは確実である。南側では第１号トレンチ15区まで確認されているが，15区で西へカーブをする可能性がある。基盤の地山は褐色の砂質土層で若干の粘土ブロックが混じる。溝底部には汚れた腐植土の堆積は認められず，流水を目的とした排水路とは異なるものであろう。



第6図　京田遺跡第1地点土層断面

SD 002 の溝は西に位置するSD 001の溝より約20cm深く掘られて構築され，東側の壁は西に比してやや急傾斜となる。東側の地山面からの深さは約50cmで，推定溝幅は 1.5～2 m となろう。溝は国鉄越後線を越えて北にのびると思われるが，やや東へ頭をふるものと推定される。溝の底部には遺物は認められず，遺物は地表下40cmまでに多く，土師器・須恵器の細片が大部分であるが，古式土師器も若干包含している。本溝の東側，11区～13区のところに柱穴様のピット群の一部が検出された。ピットは直径20cm前後のものと50cmの2種あり，深さも30～40cmである。建築遺構の一部と推定されるものであろうが，拡張しないと性格は把握できない。

溝SD 003　第2号トレンチ8区～11区のところで SD 002 の溝と重複している。溝の幅は1 m～1.25m で，深さは東壁上面から約20cmで溝底面となり， SD 002 の溝底部との差は25cmである。溝の方位はN—30°—Eで， SD 001 ・ 002 の溝を越えた西側には本溝の伸張部分が検出されず， S D 003 が3本の溝の中で最も古い時期のものと推定できる。しかし，3本の溝とも出土遺物の面から新旧を決定する材料は検出されていない。

土坑SK 001　本土坑は第1号トレンチの14～15区のところにあり， SD 001 の溝の西壁から溝底部にかける位置にある。形態は2つのピットが連結した不整楕円形で，長径2 m，短径1.4 m の規模を有し，長軸方位は北北西を示す。土坑の深度は西側で 1.3cmで，壁は垂直で直線的なところはなく，オーバーハングしたり，凸凹した状態である（図版第4左下）。

土坑内の土砂の堆積状態は，第1層が褐色の酸化鉄粒を多量に含む暗褐色土層，第2層は

土器片を多く含む暗褐色土層，第３層は木炭・灰などの炭化物層で多量の土器片を包含する。第４層は灰黒色粘土質土層，第５層は木炭・灰の炭化物層で少量の遺物を含む。第６層は灰黒色粘土質土層で湧水面，第７層暗黒色粘土層，第８層が青色粘土層で地山となる。土層の堆積状態をみると，２つの炭化物層で土層は３つに分けられ，どの層にもレンズ状の自然堆積の形状を示していた。土器は中央より壁面寄りに多くみられ，底面の上部20cmの位置に長さ70cm，幅10cmの自然木が横位で検出され，その下から須恵器の高台付坏なども検出された。

２）第２・第３地点（第４図）

第２，３地点の遺構については，トレンチ幅が50cmのため，ピットおよび溝は部分的にしか把握できず，形態・規模を明確にすることができなかった。（関　雅之）

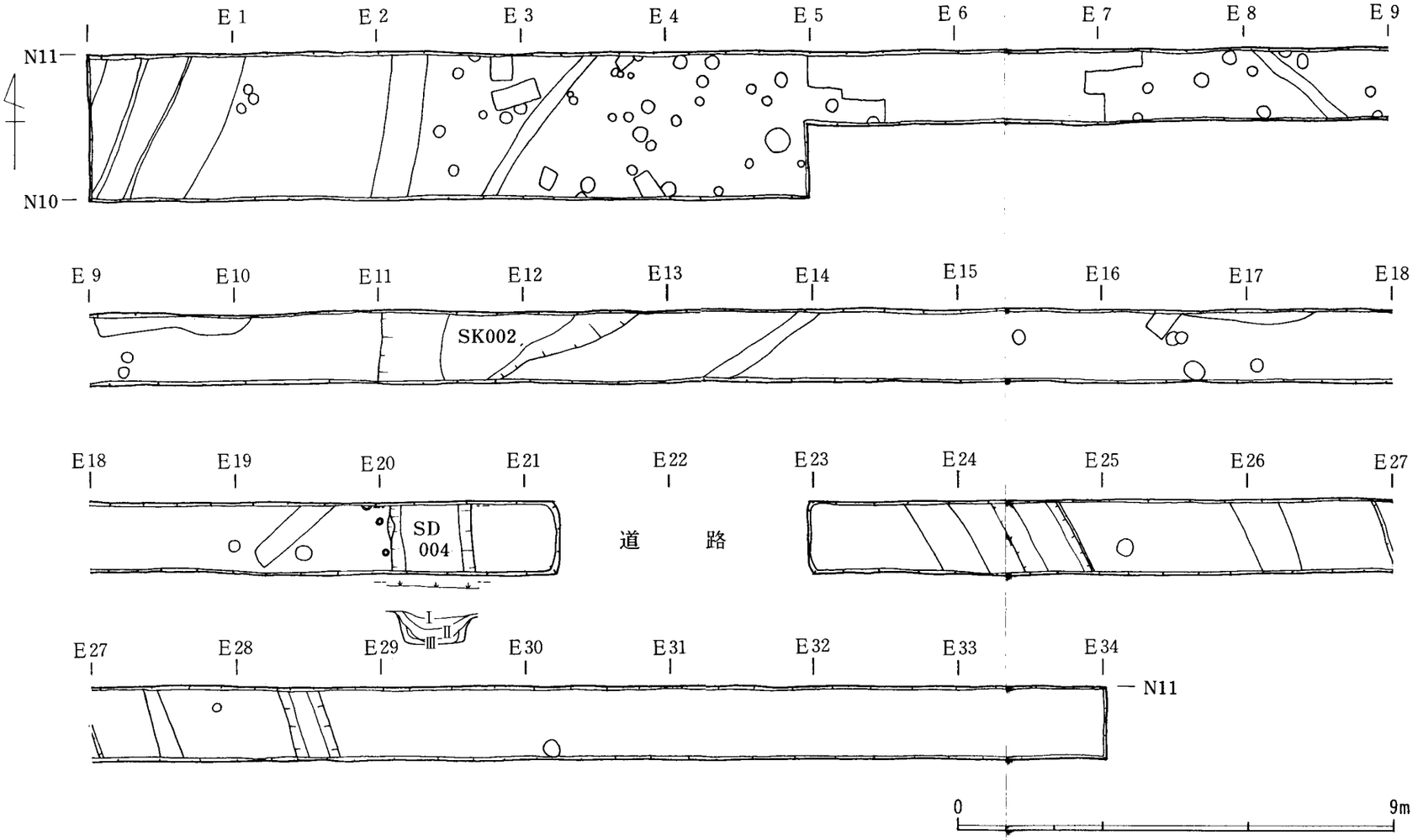
３）第４地点（第７図）

本地点には，N10Ｅ１～N10Ｅ34グリッドまでの東西方向のトレンチを設定した。トレンチは南北方向の溝の検出を目的としたもので，全長102m，幅はN10Ｅ１～N10Ｅ５グリッドまでは３m，N10Ｅ６～N10Ｅ34グリッドまでは時間や人手の事情から1.5mである。発掘は，溝あるいは溝に類する遺構以外はその遺構面の検出のみにとどめた。土層は上から表土（盛土を含む)･床土があり，床土を取り除くと遺構面に達する。表土・床土の両者での厚さは，トレンチの東端で約88cm，西端で約22cmを測り，西から東へ向うにしたがい次第に深くなるとともに湿気が多くなる。

トレンチ内では，溝・土壙のほか，多数の小穴・小溝や竪穴住居跡と推定される遺構が検出された。

SD 004　N10Ｅ21グリッドで検出した真北方向にほぼ平行する南北溝である。西辺の一部が若干崩落しているが，幅は上幅1.7m、下幅1.2mを測る。深さは遺構確認面から東辺側で約54cm，西辺側で約64cmあり，溝の側面は溝底面から約70°の傾斜で直線的に立ち上がる。溝底面は概して平坦で，断面が逆台形の溝である。北壁断面を観察すると，土層はレンズ状の堆積を呈しており，最下部に厚さ約10cmの黒灰色粘土質土（Ⅲ層），その上に暗黒褐色土（Ⅱ層）と黒灰色土（Ⅰ層）がそれぞれ約20cmの厚さの層となり順々に堆積している。遺物は，Ⅰ層から土師器片と８世紀前半の須恵器坏片（第11図26）が出土しており，それ以外の層からは認められない。また，SD 004 の西側に溝に沿うようにして２つの小穴が検出された。いずれも直径14cm，深さ12cm前後を測るもので，溝と機能的に関係を持つ可能性が指摘できるが，幅1.5mのトレンチ内でのことなので明確な判断はできない。

SK 002　N10Ｅ12～N10Ｅ13グリッドにかけて検出した。遺構確認の時点では西側のプランが真北方向に平行するので，南北方向の溝に何らかの攪乱がはいっているのではないかと推定し発掘したが，結果的には土壙状のものであった。幅はトレンチ南壁で上幅2.4m，下幅0.75m，北壁で上幅5.5m，下幅2.8mを測り，北東に向かってまだ大きく拡がるようである。深さは遺構確認面から約80cmで，底面はほぼ平坦である。北壁断面を観察すると，土層

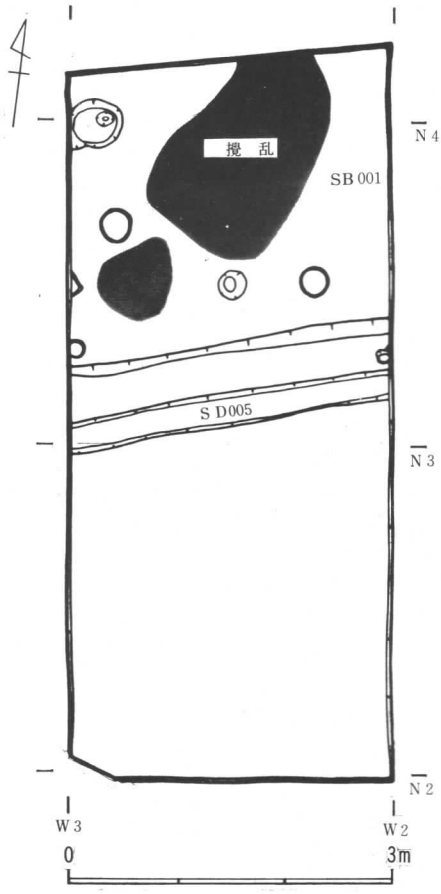


第7図　京田遺跡第4地点

はレンズ状に７層が堆積しており，遺物は下層部分を中心に平瓦・土師器・須恵器・石帯様石製品・砥石・鉄滓が出土している。（駒見和夫）

５）第５地点（第８図）

本地点には，Ｎ２Ｗ２とＮ３Ｗ２およびＮ４Ｗ２グリッドの一部までの全長6.7m，幅３mのトレンチを設定した。本トレンチは，第１地点のSD 001がＮ３グリッド付近で西に曲がる可能性があったため，ＳＤ001につづく東西溝の検出を目的としたものである。土層は上から表土（盛土を含む）・床土があり，床土を取り除くと遺構面に達する。表土・床土の両者での厚さは約50cmを測る。



第８図　京田遺跡第５地点

トレンチ内では，SD 001の延長と考えられる東西溝は確認できなかったが，基壇状遺構や小溝・小穴が検出された。

SB 001　地山成形によって周辺より約15cm高く基壇状に残された遺構である。基壇と推定されるがトレンチ内での一部の検出なので明確にはできず，現段階では基壇状遺構とした。遺構面は現地表面より50cm下であるが，この地は本来水田であったところを最近土盛りをして畑地にしたもので，土盛部を除いた旧耕作面から遺構面までは30cmと非常に浅い。そのため遺構上面はかなり削平されてしまったと推定される。その規模は，トレンチ内では基壇状の南辺の一端を検出しただけであるため明らかではないが，主軸は真北から若干西に傾くようである。また，遺構上面には小穴がいくつか存在したが，相互に規則性がみられず，基壇状遺構に直接ともなうものかどうかは，トレンチ内での発掘では不明である。

SD 005　SB 001の南辺から約35cm離れて東西方向に走る小溝である。幅は上幅約28cm，下幅約22cm，深さ約10cmを測り，断面はU字形に近い。東・西壁で断面を観察すると，床土堆積以前に掘られていることが判る。

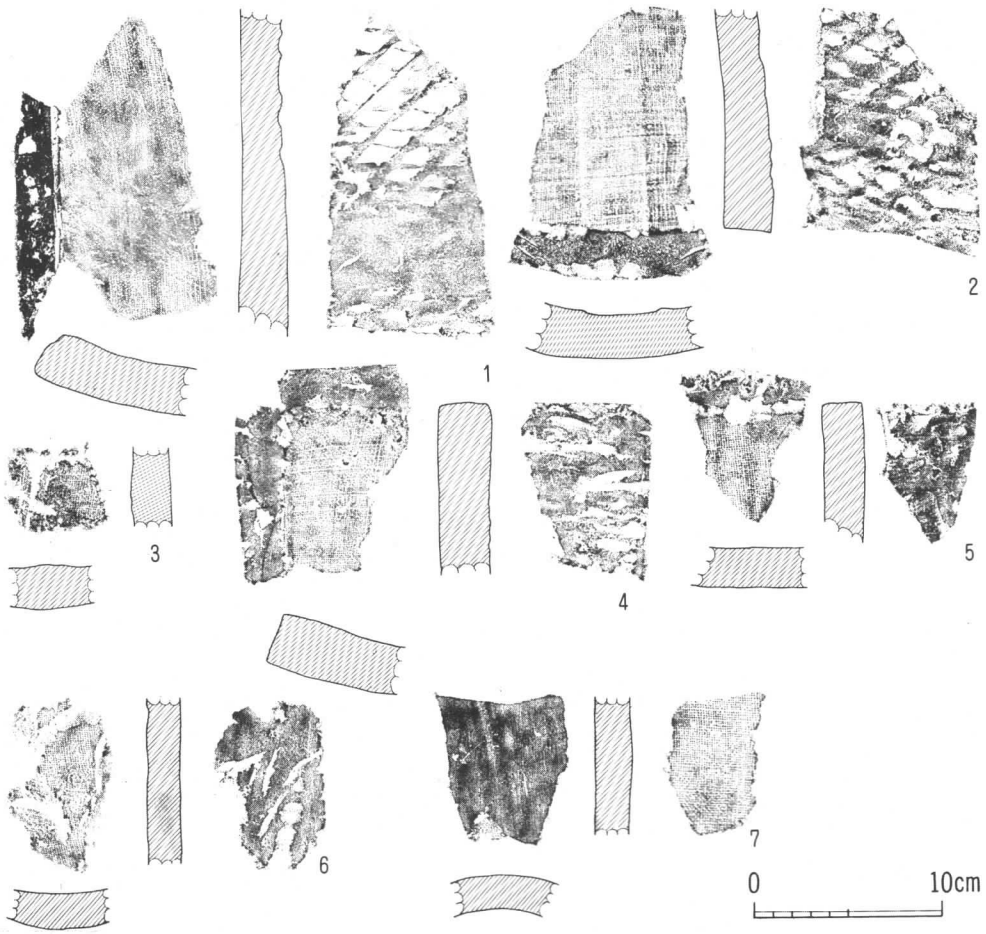
以上の点，またSD 005がSB 001の南辺に平行して走ることから，SD 005はSB 001に関連する遺構と考えられる。図版第８の２に断面を示した。（駒見和夫）

(3)　出土の遺物

京田遺跡において出土した遺物には，平瓦・丸瓦の瓦類のほか，須恵器，土師器，石製品，石器，鉄滓，木片等があった。以下，順次記して行く。

1）瓦　類

出土の瓦類は，平瓦6点と丸瓦1点だけでいずれも小片である。出土地点は，1・5・7が第1地点覆土中で，2・4・6がSK 002，3が表採であり，明確な遺構にともなうものではない。しかし，京田遺跡出土の瓦類は先に横滝山廃寺跡において出土した瓦類と同様の特徴を有することから，その関係が注目される。



第9図　京田遺跡出土瓦

以下，その特徴を明示したい。

①　平瓦（第9図1～6，図版第11）

6点が出土しておりいずれも破片である。凹面（外面）に幅3.7 cmないし5cm前後の模骨痕が認められることから，粘土板桶巻作りによる成形である。さらに，凸面（裏面）に残る圧痕から，第2次成形には斜格子の刻線叩き目が用いられている。斜格子叩き目は，横滝山

廃寺跡で出土しているものと同様に，２～５㎜の太い凸線により区画された一辺１～1.5㎝の彫りの深いⅠ類と，２～４㎜と１～３㎜の凸線により一辺0.9～1.4㎝の若干小さい菱形を区画したⅡ類の２種がある。また，模骨の桶抜きののち凹面には布目を残すが，ほとんど経線を端面に平行して用い，3㎠の単位面積中での経糸と緯糸の本数には，24～27本×26～27本の比較的粗いA類と，25～27本×34～36本の比較的細かいB類の２種がみられる。成形後の調整としては，凸面に削りとナデ，側面と端面には削りが施されている。焼成は須恵質に硬く焼きしまったものが多いが，灰白色でやや軟質なものもある。

１は，側面部欠損で，凸面にはⅠ類の斜格子目があるが，のちのヘラ削り調整により部分的に消されている。凹面にはA類の布目痕を残し，幅約５㎝の模骨痕が認められる。側面はヘラ削りが何度も行われている。

２は，広端側欠損で，凸面にはⅡ類の斜格子目を残す。凹面にはB類の布目痕を残し，幅約3.7㎝の模骨痕が認められる。広端面はヘラ削りがなされている。

３・６は，凸面はわずかに斜格子目を残すがほとんどはヘラ削りによって消されている。凹面にはA類の布目痕を残す。

４・５は，狭端側欠損で，凸面はわずかに斜格子目を残すがほとんどはヘラ削りによって消されている。凹面には４はB類・５はA類の布目痕を残す。狭端面にはいずれもシノ状圧痕が認められる。

②　丸瓦（第９図７，図版第11の４）

図示した７だけが出土した。凸面には縦位のヘラ削りが施されており，第２次成形の叩き目の痕跡は残っていない。凹面には布目が認められ，３㎠の単位面積中における糸の本数は24×25本である。

２）土　器

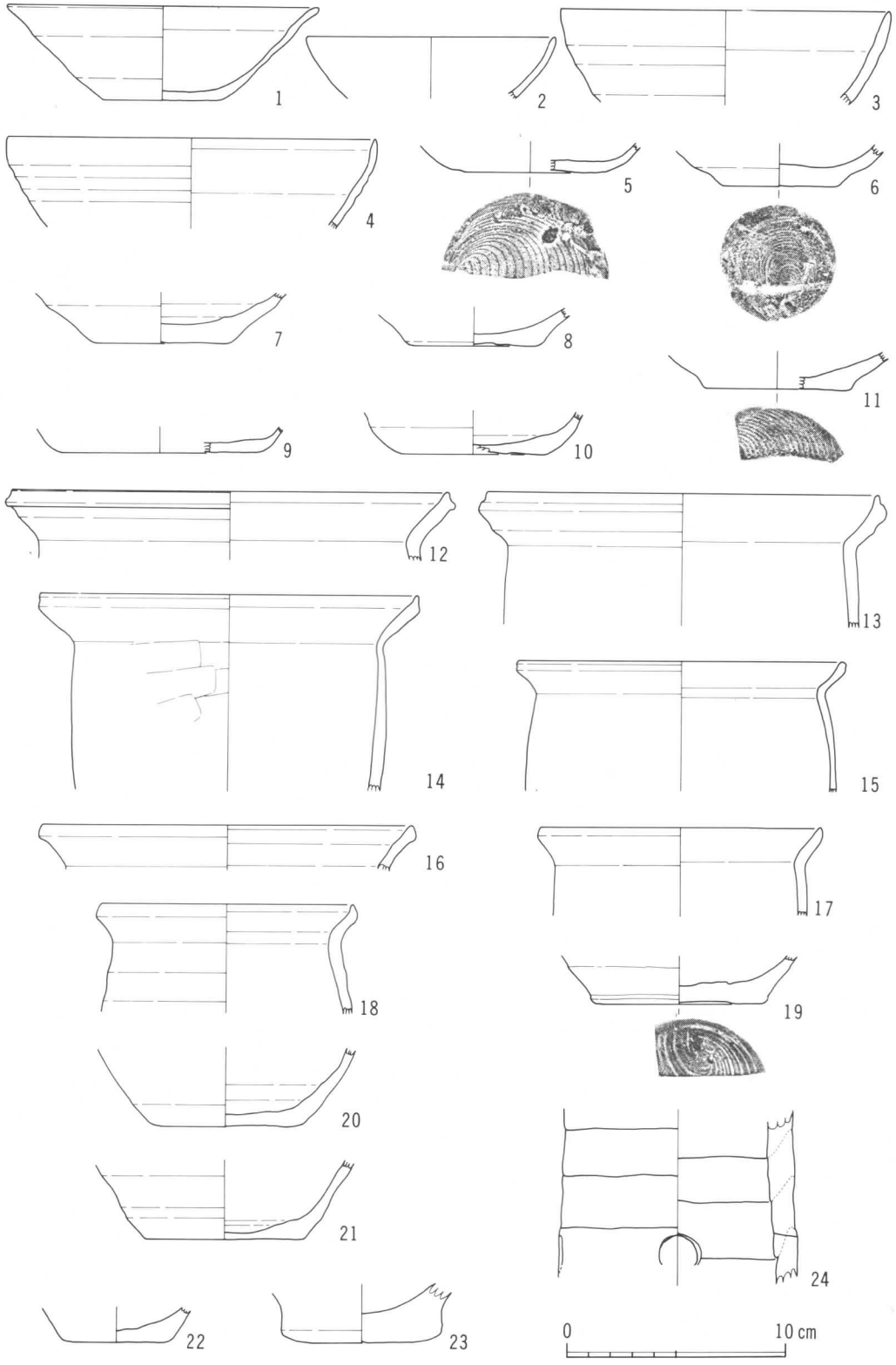
出土した土器は，土師器と須恵器である。図示した土器の出土箇所は，遺構内のみならず表土層中，表採のものも含む。以下歴史時代の土器から紹介する。

①　土師器（第10図，図版第11の５～７）

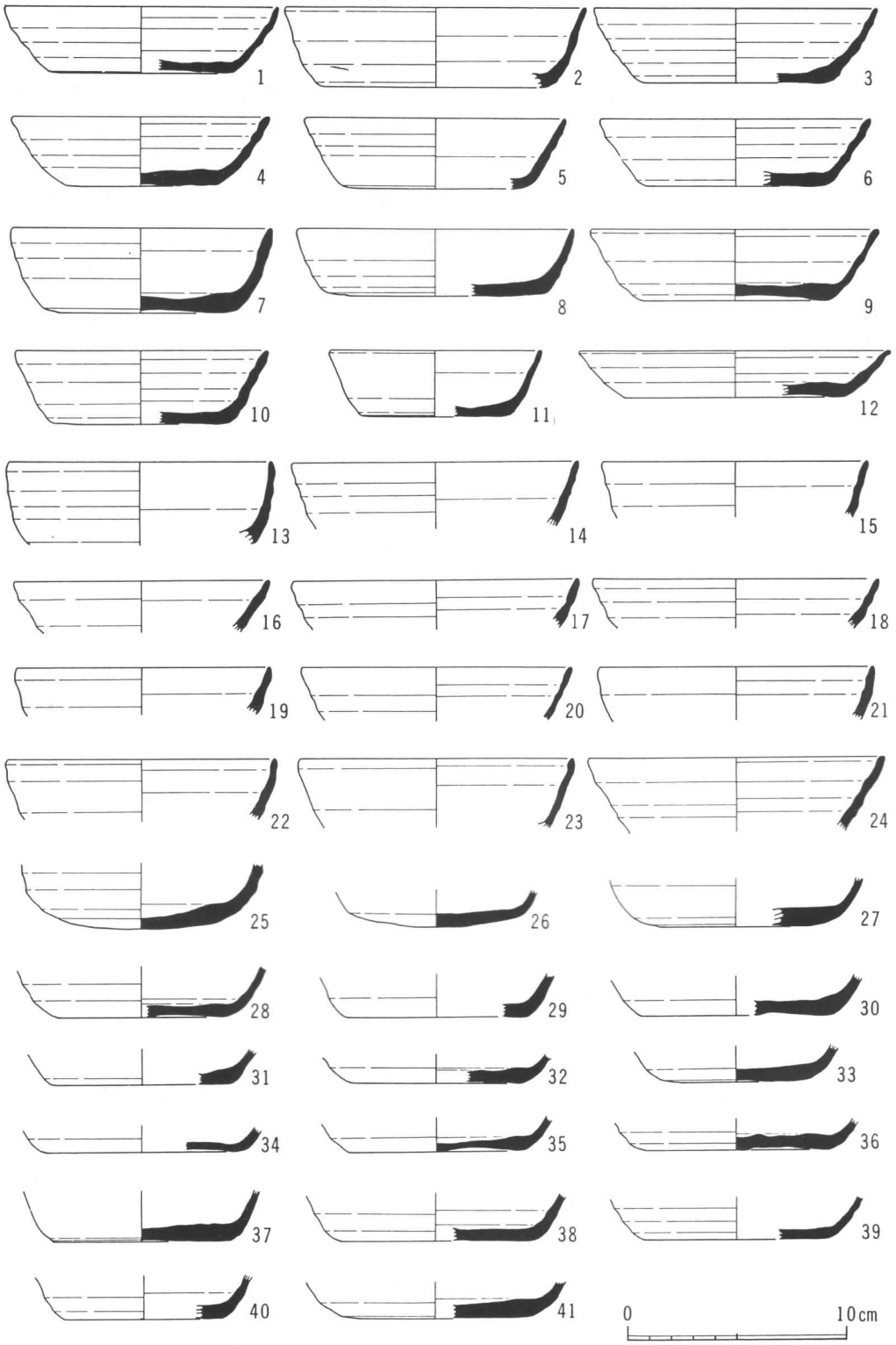
器種は坏・甕などがある。このうち遺構からの出土は１・２・４・５・10～15・18～21・24（いずれもＳＫ001）である。

１～11は坏で，唯一１だけが全体を復元できる。回転糸切りの底部から，器肉の薄い体部は外傾して立ち上がり，口唇部は丸く治まる。３・４は椀の可能性もある。５～11は底部片で，そのうち９・10は回転ヘラ切り痕を残すもので，他は全て回転糸切りである。底径の大きさや，底部から体部への立ち上がりの角度に，バラエティーが認められる。

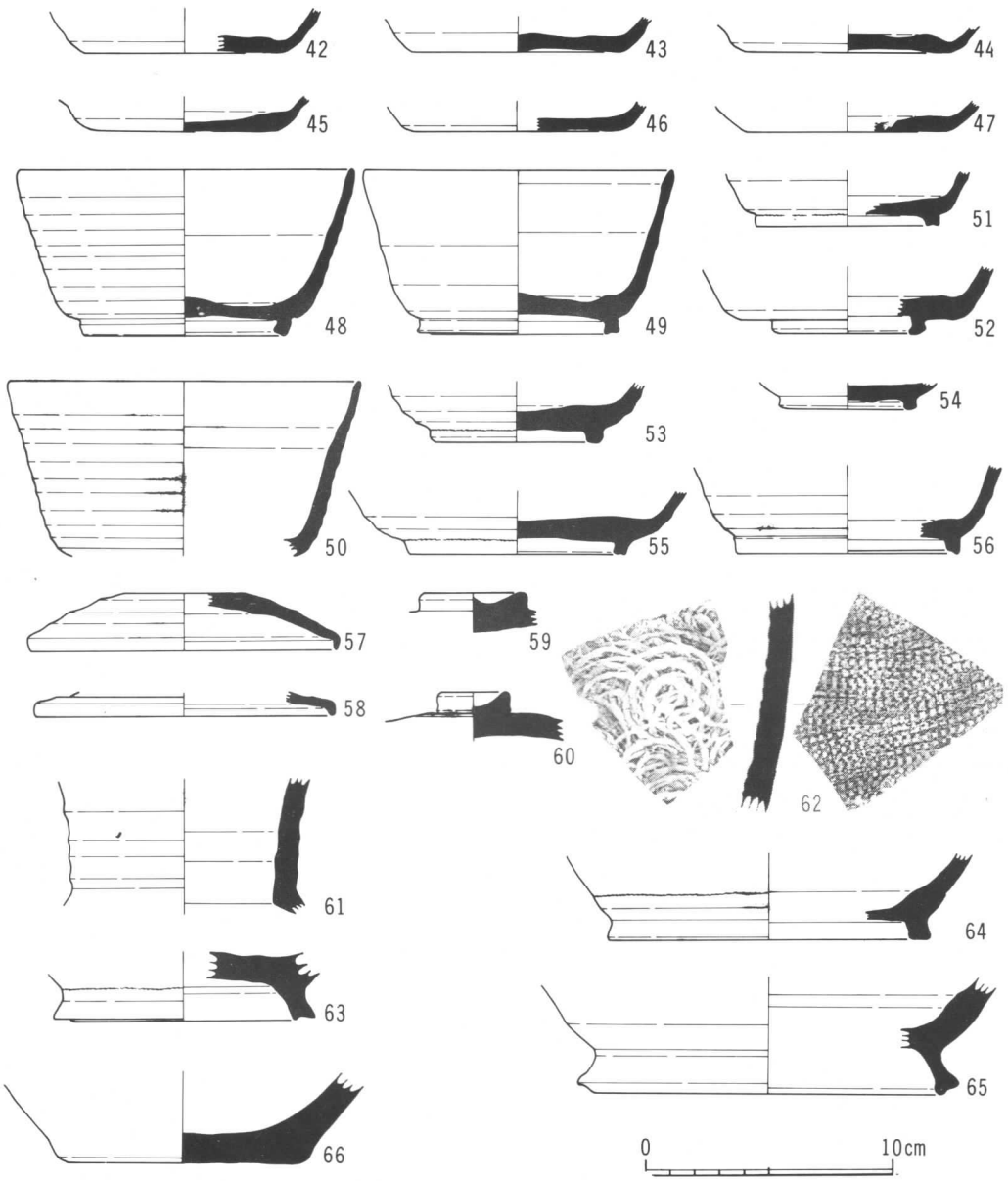
12～23は甕である。そのうち12～18は口縁部片で，その特徴からA～Dの４類に分類できる。まずA類としたものは12で，口縁部を上方と下方につまみ出して口縁帯を形成し，その口縁帯中央には凹みがめぐる。B類は13・14で，A類と比較すると口縁帯下部のつまみ出し



第10図　京田遺跡出土土師器・土製品



第11図　京田遺跡出土須恵器（1）



第12図　京田遺跡出土須恵器 (2)

が退化しており，上方へのつまみ出しだけにより口縁帯を形成し，口縁帯中央には凹みがめぐる。C類は15・16で，口縁部を外方に肥厚させることによってわずかに口縁帯を形成するが，口縁帯中央部の凹みもなくなり，全体的に鈍い感じを有する。D類は17・18で，口縁部をわずかにつまみ上げているだけのものである。両者の間でも，18から17へのつまみ上げの省略化が認められる。またD類は形態的に小形のものである。19～23は底部片で，そのうち19～21は回転糸切りで，22・23はナデ整形が施されている。

24は所謂筒形土製品の破片である。復元最大径は10.8cm，残存高7.6 cmを測る。胴部は幅約2 cmの粘土紐積み上げにより形成され，円窓を有する。円窓は1箇所しか残存しないが，本来は2乃至4箇所に施されていたと推定される。胎土は極めて粗い砂粒からなり，外面には二次加熱をうけた痕跡が認められる。

② 須恵器（第11・12図，図版第11・12）

器種は坏・高台付坏・蓋・壺・甕がある。このうち遺構からの出土は18・26・30（ＳＤ004），1～3・6・7・10～13・19・21・25・30・35・38・41・48・49・50・53・60（ＳＫ001），62・65（ＳＫ002）である。

1～47は坏で，底部の残存するものは全て回転ヘラ切り痕を残す。このことは，図示できない細片に至るまで指摘でき，回転糸切りのものは一片も出土しなかった。坏は，底部の形態と底部から体部立ち上がり部にかけての整形の有無により，3類に分類できる。まずA類とするものは25・26である。両者はいずれも全体を復原できない破片であるが，底部は丸底気味で，二次調整として底部全面がナデによって整えられている。その底部から，体部はあまり角度を開かずに立ち上がる。B類は1～6・27～34で，底部にはヘラ切り痕を残すが，その外縁から体部の立ち上がり部分にかけてナデ整形が施されていることを特徴とし，底部と体部との境が不明瞭となっている。器形全体を復元できるものを見ると，1・2・4～6は体部が直線的に外傾して立ち上がり，口唇部は細くすぼまるものが一般的であるが，3のように体部が内弯気味に立ち上がり，口唇部は細くすぼまるものもある。C類は7～12・35～47で，ヘラ切り痕を残す底部から体部の立ち上がり部にかけてナデ整形を施さず，その境が明瞭な一群である。器形全体を復原できるものを見ると，7・8は体部が内弯気味に立ち上がり，口唇部は細くすぼまるもので，9・10は体部が直線的に外傾して立ち上がり，口唇部は内側に肥厚する。11は小形のもので，他と比較すると法量が小さい。12は器高が低く，口径に対する底径の占める比率も他と比較すると高い。形態的にも皿に属する可能性が強い。これらのように，C類はB類に比べて形態的なバラエティーがある。13～24は口縁部の破片で，全体的には体部は外傾して直線的に立ち上がり，口唇部は細くすぼまる形のものが一般的だが、中には体部が内弯気味に立ち上がるもの（13・22）や，口唇部が内側に肥厚するもの（22～24）もある。

48～56は高台付坏である。器形全体を復原できるものは48・49の2点だけであり，いずれも底部は回転ヘラ削り後高台貼付で，高台は断面四角形でしっかりしている。体部は外傾して直線的に立ち上がり，48は外面に明瞭な水挽き痕を残す。50は口縁部片であるが，形態的特徴の比較から高台を有すると推定される。体部は直線的に外傾して立ち上がり，外面に明瞭な水挽き痕を残す。51～56は底部片で，全て底部は回転ヘラ削り後高台貼付である。54は全体的に高台に鋭利さがなくなり退化した様相をもつが，他はすべて断面四角形のしっかりした高台を有する。

57～60は蓋である。57はつまみを持たないと推定され，天井部は回転ヘラ削りが施され，口縁部はつまみ出しにより，端部は細くすぼまる。58は口唇部がかなり肥厚する。59・60はつまみ部で，いずれもつまみ中央部が凹む特徴をもつ。

61は壺の頸部である。器面には水挽き痕が残る。

62～66は甕である。62は胴部片で，内面は同心円状のタタキ，外面は格子ふうタタキが施されている。胴部片で図示したのはこれ一例だけだが，他に出土した甕胴部片も概ね同様の整形である。63～66は底部片で，そのうち63～65は外方にふんばるしっかりした高台を有するもので，また65は無高台のものである。

③　古墳時代の土器（第13図，図版12の４）

古墳時代の土器は，図示した１点と数点の破片が出土した。いずれも第１地点の同一小穴からの出土である。

図示したものは器台形土器のほぼ完形品で，受部径8.9 cm，裾部径10.0cm，器高8.6 cmを測る。受部口唇部には連続する刻み目がめぐり，裾部には３ケ所の穿孔を有する。整形は受部には内外面とも横方向のヘラ磨き，裾部外面には縦方向のヘラ磨きがなされ，また外面から受部内面にかけて赤色塗彩が施されている。古式土師器の範疇に含まれるものである。

④　小　結

京田遺跡で出土した土器は，遺構内外のものを合わせてコンテナ約４箱である。本遺跡では良好な一括遺物はなかったが，主体を占める歴史時代の土器について，破片を含めての検討からいくつかの知見が得られた。県内の歴史時代の土器様相については，近年上越市今池遺跡において良好な資料が得られ詳細な検討が加えられており(註１)，研究の糸口となっている。ところで，中越地方の該期土器様相の把握や編年は未だ不明な点が多い。そこで，ここでは京田遺跡出土土器において気付いた点をあげ，今後の問題提起としたい。

まず，器種構成では須恵器が圧倒的に多く，その中でも坏の量が最も多い。一方，土師器では少量であるが坏と甕がほぼ同量出土している。それらはいずれも形態的特徴から時間幅を持つようである。以下その点に留意しながら順次記して行く。

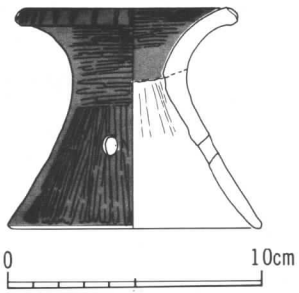
須恵器坏は，前述したように，底部の形態と底部から体部立ち上がり部にかけての整形により，次の３類に分類できた。

A類—丸底気味の底部で，二次調整として底部全面がナデによって整えられている。

B類—ヘラ切り痕を残す底部外縁から体部の立ち上がり部にかけてナデ整形を施し，底部と体部の境が不明瞭。

C類—ヘラ切り痕を残す底部外縁から体部の立ち上がり部にかけてナデ整形を施さず，底部と体部の境が明瞭。

一般的に，須恵器坏の器形は丸底から平底へと変化し，整形は生産の大量化にともない丁寧なものから簡略化されたものへと“手ぬき”の方向性が認められる。このことから，ここ



第13図　京田遺跡出土古式土師器

で分類した3類は器形のバラエティーとして捉えられるのではなく，A類→B類→C類へと丸底から平底への変化とともに整形の簡略化と理解され，その違いを時間差とすることができる。そして，C類がB類と比較して細部の形態や法量等においてバラエティーに富んでいるという現象は，大量生産化に伴なう形態的分化として理解されよう。ところで，A類に近似する須恵器坏は，中越地方では8世紀初頭に位置付けられている長岡市笹山窯跡(註2)においてみられる。笹山窯跡出土の坏と本遺跡のA類とを比較すると，A類の方が底部と体部との境が明確化されている点から若干時期が下ると推定されるが，8世紀前半を越えるものではないであろう。一方，C類は9世紀代に普遍化するものであり，須恵器坏に認められる年代幅は比較的長期にわたると考えられる。

土師器坏では，1は糸切り底を持ち口径に対する底径の占める比率が小さい特徴を有することから，10世紀以降の所産と推定される。しかし，他のものは底径も大きくヘラ切り痕を残すものもあることから，8世紀末から9世紀代の年代幅で捉えられよう。

土師器甕は，前述のようにその口縁部形態から4類に分類した。A類は須恵器甕の口縁部を模倣したものでロクロの使用が認められる。土師器生産にロクロ技術が導入されるのは須恵器生産の開始とほぼ同時に認められるが，土師器の中でロクロ使用のものが主体を占めるようになるのは8世紀中葉以降と推定される(註3)。A類とした口縁部形態は，8世紀中葉以降出現する須恵器甕の口縁部形態と酷似することから，その年代をA類出現の上限とすることができよう。一方，B・C類は須恵器甕の模倣とするよりも，A類がシャープさを失ない退化して行ったものと理解した方が妥当である。すなわち，ロクロ技術を導入し須恵器甕の模倣として形成されたA類は，やがてB類→C類へと独自に“退化”という現象で変化して行く。これに対して，D類は小形のものであり，A・B・C類とは異なった系統のものと考えられる。D類は，口縁部をわずかにつまみ上げることによって口縁帯を形成するものだが，その中でも18から17へとつまみ上げを省略して行く過程が認められ，時間的変遷と理解することができる。但し，これらは層位において確認されたものではなくあくまでも形態的に想定したものであり，今後の問題提起としたい。

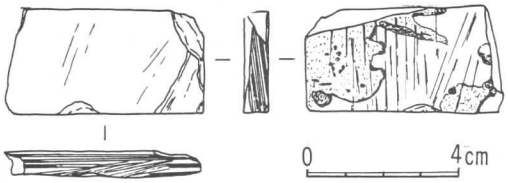
また，本遺跡では所謂筒形土製品が出土している。筒形土製品は多くが臨海部の遺跡で出土しており，二次的な加熱を受けた痕跡を残す場合が多い。県内では佐渡および粟島の製塩遺跡で出土が確認され，本間嘉晴氏がその用途・出土例についてまとめておられる。岸本雅敏氏によれば(註4)、平底バケツ形の製塩土器とセットとなる器台として捉えられている。京田遺跡の位置は海岸から直線で約5kmも離れており，途中には標高約65mを測る西山丘陵が両者を隔てている。そのため土器製塩が行われていたとは考え難い。しかし，本遺跡出土の筒形

土製品は二次加熱の痕跡が認められており，何らかの“焼き台”として使用されたものと考えられる。(註5)

3）その他の遺物

① 石帯様石製品（第14図，図版第12）

SK 002 の底面付近で出土した。残存する大きさは 5.2 cm× 2.7 cm，厚さ0.65cmを測り長方形を呈する。石材は滑石で，暗灰色をなす。表裏面とも大変良く磨かれており，側面には擦痕が残る。裏面にはわずかではあるが鉄さびが付着している。用途は，石帯の鉈尾部分かとも推定されるが，明確にはできない。孔はない。



第14図　京田遺跡出土石製品

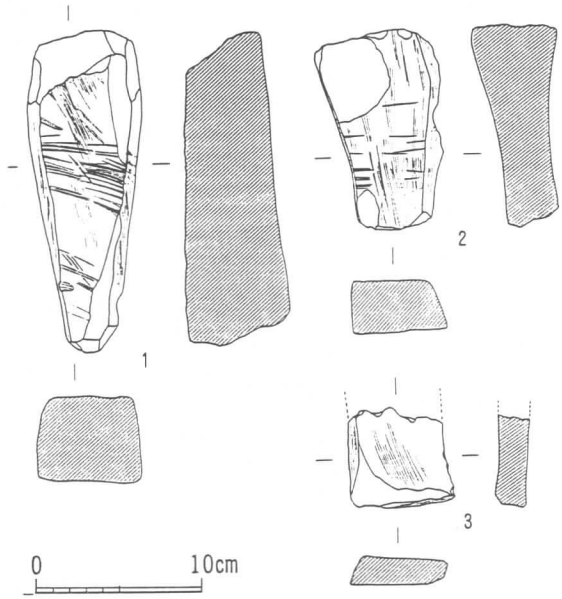
② 砥石（第15図，図版第12）

砥石は 3 点出土した。いずれも SK 002，およびその周辺からの出土である。

1 は，長さ19.4cm，最大幅 6.2 cmを測り，石材は凝灰岩である。バチ形を呈し，砥ぎ面は 4 面である。砥ぎ面には砥いだ鉄器によって切り込まれた痕跡が，沈線状になって数条残存する。

2 は，長さ12.0cm，最大幅 5.9 cmを測り，バチ形を呈する。砥ぎ面は 4 面である。

3 は，残存長 6.0 cm，最大幅 5.9 cmを測り，石材は凝灰岩である。バチ形を呈するものと推定され，残存する砥ぎ面は 5 面である。



第15図　京田遺跡出土砥石

③ 鉄滓（図版第12）

SK 002 から 2 点している。いずれも鍛錬鍛治滓と推定される。そのうちの 1 点には，媒介材のカルシウム分が表出したものと推定される白色物質が認められる。(註6)

④ 木片（図版第12）

SK 001 の木炭層から，細片を含めて約20点出土した。一部が加熱により炭化しており，また若干の加工痕が認められる。用途は不明だが，1 本は直径約 6 cmの杭状のものである。

註

1　『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ—今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡—』新潟県教育委員会 1984

2　『笹山遺跡』長岡市教育委員会　1981

3　上越市今池遺跡では，Ⅰ期（8世紀前半）では非ロクロ土師器が主体でロクロ土師器をわずかに含むが，Ⅱ期（8世紀中葉）ではロクロ土師器が主体であり，この間に大きな変化があると指摘されている。

4　岸本雅敏「富山県における土器製塩の成立と展開」『北陸の考古学』1983

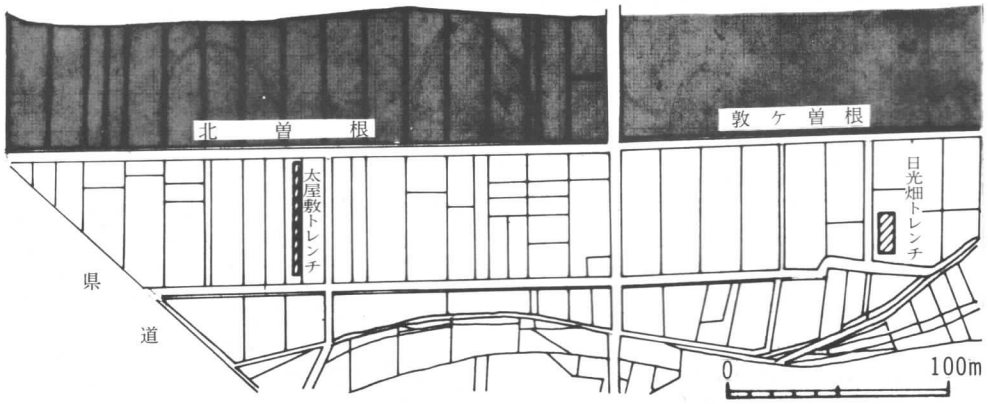
5　岸本雅敏氏より，筒形土製品は塩生産と関係の深い遺物であることから，内陸部においては焼き塩に使用された器台の可能性があるとの御教示を得た。実際に焼き塩が行われていたとすると，本遺跡の性格を考えるうえで興味深い。

6　穴沢義功氏の御教示による。　（駒見和夫）

Ⅳ　太屋敷・日光畑遺跡

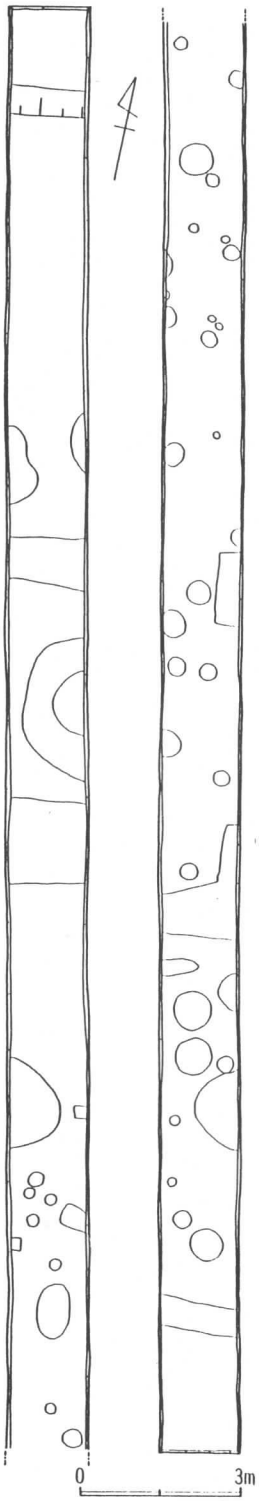
(1)　遺跡の概観と調査経過

太屋敷・日光畑遺跡は，ともに標高12m前後の東西にのびる同一自然堤防上に約300 m離れて位置する。自然堤防は南に国道116号線が走り，北に向って緩やかに傾斜する。京田遺跡からの位置関係をみると，太屋敷遺跡は南東約900 m，日光畑遺跡は南東約1.2 kmにあたる。現在は宅地と畑地が入り混っており，東約500 m先には大河津分水が北流する。



第16図　太屋敷・日光畑遺跡のトレンチ配置（スクリントーン部分は水田）

両遺跡は，昭和60年夏に実施された町史編さんにともなう横滝山廃寺跡周辺遺跡分布調査において検出された散布地である。遺物は自然堤防中央部から北側微斜面にかけて土師器・須



第17図　太屋敷遺跡トレンチ

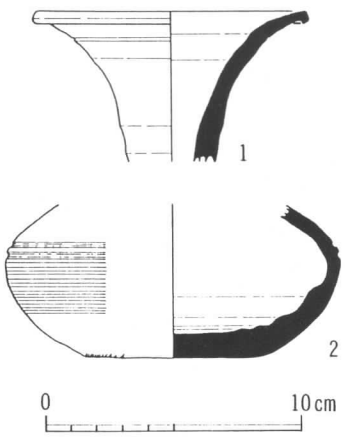
恵器片が比較的多く散布し，太屋敷では灰釉陶器の埦底部片も採集された。また，日光畑の地主の本間嘉平治氏方には，耕地整理時に発見されたという珠洲焼などの中世陶器（甕完形品）が保管されている。

今回は，トレンチ発掘による遺構確認調査を実施した。両遺跡とも調査時には畑に作物が植え付けられており，そのためトレンチは作物の合い間や休耕地を探し，その地割りに沿って設定せざるを得なかった。調査は京田遺跡の調査と併行して，8月22日から小型ユンボによる表土剝ぎを開始し，25日には作図・写真撮影・埋め戻しを終了した。埋め戻しに際しては，遺構の保存と再発掘を予想し浜砂を発掘区全面に敷いた。

(2)　太屋敷遺跡の調査（第17図）

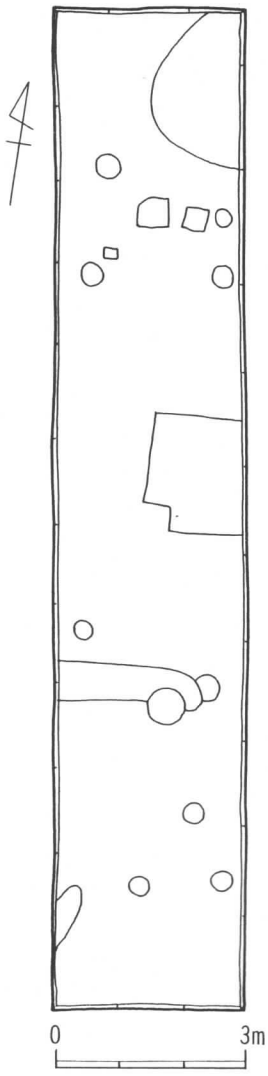
太屋敷遺跡には，自然堤防を横断するようにその最も高い部分から北側裾部にかけて長さ53.5m，幅1.5ｍのトレンチを設定した。土層は表土を取り除くとすぐに遺構面に達するが，トレンチ北側部分では間に床土が入る。耕作面から遺構確認面までの深さは30cm前後であるが，トレンチ北側では約65cmと深くなり湿気が強くなる。

トレンチ内で検出された遺構には，溝・土坑・小穴がある。小穴は多数検出されており建物跡となる可能性のものも存在するが，幅1.5ｍの中では明確には判断できなかった。また，これらの遺構は自然堤防の高い部分に集中し，裾部付近ではみられなくなる。



第18図　太屋敷遺跡出土須恵器

遺物は土師器・須恵器片が約20点出土した。図示できるものは第18図の２点だけである。１は須恵器長頸壺の口縁部で口径10.8cmを測る。口唇部は下方に肥厚し断面が丸くなっており口縁下部には浅い沈線がめぐる。２は須恵器短頸壺の胴部であろう。胴部のやや上位に最大径を持ち，２条の



第19図　日光畑遺跡トレンチ

深い沈線とその下方に櫛状工具による浅い沈線が15条めぐる。また底部と胴部の境にはヘラによる刻み目が施されている。2の時期は7世紀代にまでさか上るものと考えられる。

(3)　日光畑遺跡の調査（第19図）

日光畑遺跡には自然堤防の最も高い部分に長さ15.8m，幅3mのトレンチを設定した。土層は耕作土を取り除くとすぐに遺構面に達する。耕作面から遺構確認面までの深さは30～40cmである。

トレンチ内では小溝・土坑・小穴が検出された。規則的に並ぶような小穴などは認められなかった。

出土した遺物は須恵器片が3点で，図示できるようなものはない。平安時代頃の土器と推定される。　　（駒見和夫）

V　京田遺跡と周辺の地名

(1)　はじめに

地名は歴史の残影といわれる。発掘調査に関連して，本地域に古代越後官衙の名残りが残っていないだろうか。ということが問題になった。そこでこの地に残る小字名や伝えられている俗称名を明らかにするとともに，その関連について若干の考えを述べ，今後の参考に供したいと思う。

まず，“地名図”を作成することとし、京田遺跡を中心に大字竹森，大字小豆曽根，大字北曽根，大字敦ケ曽根を含め，明治末年の土地更正図を参照し，小字毎の区切りを2500分の１の地図に落し，小字名分布図を作成した。(第20図参照)

つづいて，小字の中の俗称名を検地帳や山割帳など古文書類から採集するとともに，区長さんや古老から聞き取り載せていった。

考察は『古代の役所』(註１)の記述を主に，『県内地名新考』(註２)『温古の栞』『越佐史料』『大日本地名辞書』等を参考にした。

(2)　京田遺跡周辺の地名

作図した小字，俗称名の地図を参考にしながら関連すると思われる京田遺跡周辺の地名から考察していくこととしたい。

１）兵吾田〔ひょうごだ〕

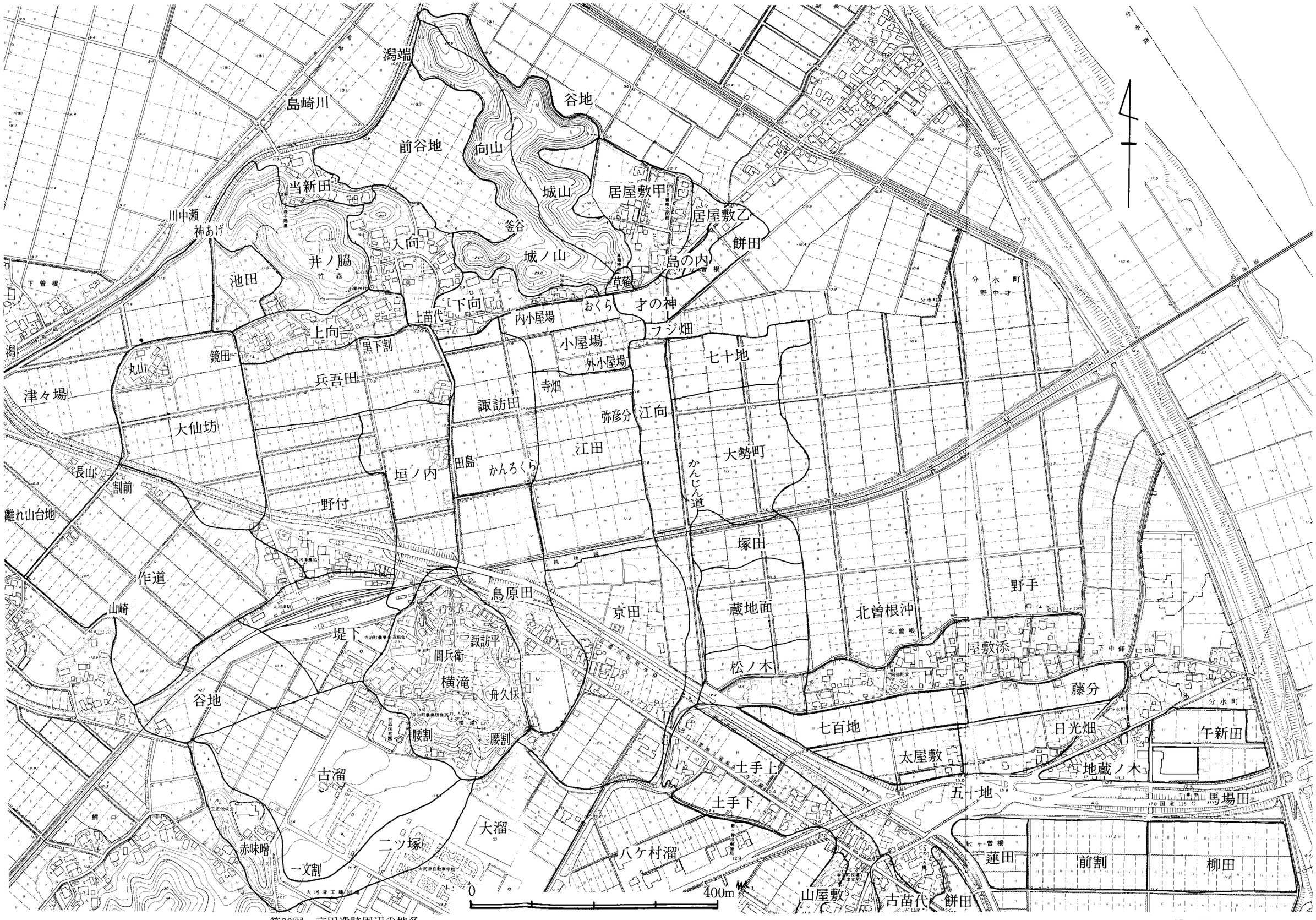
発掘地点の北，竹森本村寄りの水田についている小字名である。〔ひょうごだ〕の呼び名については村内には特別の伝承もない。

古代の国府や郡衙を詳述している『古代の役所』によれば国衙の建物については文献資料で「庁」「正倉」「兵庫」「館」「門」「垣」「雑屋」等と呼ばれるものがあったとしており，ここにある「兵吾田」の兵吾は「兵庫」と比定されないだろうか。それによれば「兵庫」は武器や兵糧を納めた倉庫であり，鳥取県倉吉市の伯耆国衙跡の西方には「兵庫谷（ひょうごだに)」の地名が残っており，また鹿児島県川内市の薩摩国国府指定地にも「兵庫原（ひょうごばる)」の地名があると述べている。

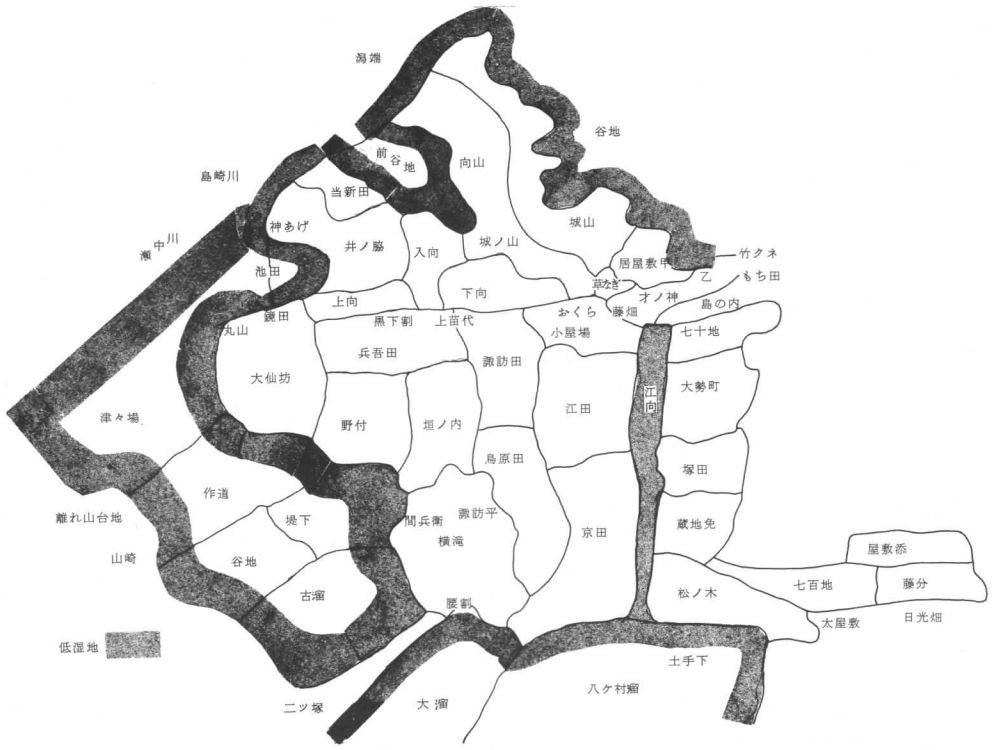
この地名は古代役所確認の有力なてがかりになるものと思われる。

２）垣の内〔かきのうち〕

横滝山より竹森本村へ入る道筋の西側一帯を「かきのうち」と呼んでいる。現在は宅地と田地となっている。『古代の役所』では「垣」は役所の諸施設を囲むもの。これに「門」がつく。刑法にあたる律の規定では「国垣」すなわち国衙の垣を越えたものは「杖九十」の棒打ちの刑に処せられることになっており，古代では塀など外と分け隔てる構築物が大変重視されたらしいと記している。



第20図　京田遺跡周辺の地名



第21図　低湿地に囲まれる竹森集落

小林存氏は「院内や堀の内に由来する占居形態に〈垣の内〉がある。垣の内はカイトとも呼ばれ，〈曾丹集〉に山里はカイトの道も見えぬまで雪の降りしきるという歌があるが，曽根好忠は王朝末期の歌人であり，そうすると堀の内や院内よりずっと古いことになる」(註3)と述べておられる。

3）京田〔きょうでん〕

発掘地点となった京田であるが，京田は京殿であって古代国衙の中心施設を意味しているのかもしれない。

京田は田の名であるが，ここは古くから微高地性を帯びた土地で主として畑地として利用されてきており，建物の立地条件にもかなっているといえる。

4）小屋場〔こやば〕

小屋場は竹森の小豆曽根集落寄りにある。

小屋場地内にはさらに「内小屋場」「外小屋場」の地名が残っており，「おくら」と呼ぶ俗称もここにある。国衙には「正倉」があり，徴収した稲穀等を収納した倉庫を指すとしているが，この近辺には「しょうそう」の地名は伝えられていない。「おくら」「小屋場」がそれにあたるのかもしれない。「正倉」の出現時期が問題である。

近くに「かんろくら」または「かんろくろ」という俗称もあり，倉庫の立ち並んでいた残

影といえなくもない。また小屋場の一角に「寺畑（てらばたけ）」がある。

5）藤畑〔ふじばたけ〕

小屋場の東にあり，大字小豆曽根の小字である。『古代の役所』では下野国国衙跡から「検領藤所返抄郡雑器所申送」の木簡が発掘され，藤所は藤づる等の編物製品を扱う役所でないかと推定されている。

ここでは「藤所」ではなく「藤畑」なのでそうした役所跡の推測は当たらないかもしれない。なお，竹森の南の敦ケ曽根に「藤分」という小字もあるので関連も考えられる。

6）大仙坊〔だいせんぼう〕

「垣の内」「兵吾田」の西方にある田の小字名である。その大仙坊に関する伝承はなにも残っていない。寺院跡か，塔頭であったのか，あるいは横滝山廃寺の関連施設か，それとも京の条坊制によった一区劃であったのかもしれない。

7）鳥原田〔とっぱらだ〕

京田，垣の内，横滝の地続きだけにその起こりを知りたい。『県内地名新考』でも「とっぱら」は不明としており，地元にも手掛かりとなる伝承もない。ただ明応6年（1497年）12月21日の志駄景義譲渡譲状写に「…北曽根ノ戌亥ハ鳥喰畠ヲ堺…」[註4]とあり，方角からも，他に類似の地名の見当たらないことからも「鳥原田」を指すのではないかと思われる。今から500年前の鳥喰畠と現在の鳥原田の関連解明をまちたい。

また『竹森史』[註5]に「鳥原田と諏訪田の中程に干天にも稲の成育が盛んにして草丈の一段と伸びる川筋のあと判然とする箇所あり」と記している。古い時代の堀割かもしれない。

8）江向〔えむき〕

この江向は地図でわかるように，竹森村と北曽根村の間にあって南より北へ向かう細長い田につけられている小字名である。かっての川筋とも思える。竹森区長小田二三男氏によれば，江向きにそって現在も小豆曽根方向へ用水が流れており，「江向」の西側竹森地内は高く，東側の北曽根沖は一段低くなっているという。

また「江向」にそって「かんじん道」という地名が残っているが，一体何を意味しているのだろうか。

9）城ノ山〔じょうのやま〕

同じ山でも竹森側では「城ノ山」，小豆曽根側では「じょうやま」と呼んでいる。その山の下にある家は古くから「じょう」という屋号が付いていることからも城跡は濃厚といえよう。

『温古の栞』によれば「三島郡西越荘竹森山の古城跡は文明年中足利家の近臣岩井周防守，上杉家を便り来たりて居城す，云々…」と伝えており，中世における山城の役割をうかがわせる。

しかし，それ以前古代役所の背後にある山城として防塞上の役割を果たしていたとも考えられる。

10) 井の脇〔いのわき〕

竹森集落内の北西に位置する標高20m の丘陵全体を「井の脇」と呼ぶ。昭和60年の調査では丘陵縁辺に三基の円形の土盛りがあり，いずれも径約８m，比高1.5m ～2m を測定し，塚状のものを確認している。表採で朱塗りの土師器片の採集もあった。(註6)

井は井戸であり，水源である。故宮田貞治郎氏によれば「井の脇の井戸水は“日光清水”と呼ばれ眼病に良くきくといわれた。その清水の脇に“どうじょう”という堂があり，本尊は上品上生の阿弥陀仏をまつり，宗の彼是を問わず村の鎮守仏として９月７日に秋祭をしてきた。本尊は国上寺の本尊と同木と伝えられる(註7)」との伝説がある。

いずれにしても，大切な水源として古くより利用されてきたに違いない。

11) 御竹藪〔おたけやぶ〕

江戸時代の文化15年（1818）の山割帳(註8)によると「御竹藪」という地名がでてくる。現在その地名はなく，他に次郎助上竹藪，居掛表竹藪もあるがいずれも所在不明である。

村人は「井の脇山」の下あたりでないかといっているが，竹藪に「御」という敬称の付いているのが，気懸かりである。

大字竹森の地名の由来になっているのかもしれない。今後の研究が俟れる。

12) 津々場〔つづば〕

地形からしても島崎川の河辺に近く，潟等の低湿地をのぞむところである。「津」は船着き場を意味するといわれることから，港の役割をになっていた場所でなかろうか。

その「津々場」の一角に「神揚げ（かみあげ)」と俗称されている地点がある。村内の伝承では村の祭神“諏訪大明神”をここから揚げて神社にお祭りしたと伝えているが「守揚げ(かみあげ)」とも読める。国衙の港として役人の船着き場であったのかもしれない。

13) 横滝〔よこだき〕

丘陵地横滝山一帯を指す小字名である。地域の多くは「横崎山(よこざきやま)」というが，地籍上は「よこだき」である。横滝の地名の起こりについては何の伝承もないが，横滝山は先史時代の遺跡地として古くから知られており，昭和50年代数回にわたる発掘調査で古代寺院跡として脚光を浴びた。

横滝山の南つづきに「二ツ塚」の丘陵があったが，「古溜（こだめ)」等を埋め立てて工場用地に変わった。横滝山には「間兵衛(まへい)」「諏訪平(すわだいら)」「舞台塚(ぶたいづか)」「庚塚(かねづか)」等の地名が残り，丘をとりまく一段下がった畑を「腰割(こしわり)」と呼んでいる。また東側に「舟窪(ふなくぼ)」という沢がある。これは国上寺からの僧がここに舟を繋ぎ，横滝山の無住の寺で経を上げたという伝承を持つ沢である。(註9)

14) 入り向き〔いりむき〕,上向き〔かみむき〕,下向き〔しもむき〕

大字竹森の住宅のある地区の小字名である。井の脇，向山，城山の後背丘陵の入り組んだ沢にあり，北西の季節風から守られ住宅地としては最適である。小豆曽根の「居屋敷（いや

しき)」と並んで古くからの居住地であったと想定される。

15) カギ田〔かぎだ〕,鍵田割〔かぎだわり〕

これは竹森に近い大字新長に残る小字名である。

古代国府に関連して「印鑰(いんにゃく)」という地名をあげているが，印鑰とは印と鍵のことで，つまり国司が管理する国衙や正倉の鍵に由来する地名である。「カギダ」が印鑰に相当する地名かどうかはわからないが，参考までにあげておく。

16) 鏡田〔かがみだ〕

前述の大仙坊の一角に「鏡田」という地名がある。別に「鐘田」という説もあり，区長さんは鏡と鐘は字も似ており記録違いでないかといわれている。いずれにしても鏡か鐘が出土したことにちなんだものでなかろうか。

『竹森史』によれば「上杉謙信公の陣鐘という鐘が村の堂にあった」という伝説もあり，関連も考えられる。

(3) その他の地名

以上，京田を中心にその周辺の地名について若干の考察を述べてきたが，その他の地名について大字別に挙げておくこととしたい。

1) 大字竹森

小字…「前谷地(まえやち)」「向山(むこやま)」「池田(いけだ)」「野付(のずけ)」「堤下(つつみした)」「作道(つくりみち)」「諏訪田(すわだ)」「江田(えだ)」

俗称…「釜谷(かまんだに)」「弥彦分(やひこぶん)」「黒下割(くろしたわり)」「挟場割(はざばわり)」「川中瀬(かわなかせ)」「丸山(まるやま)」「一文字割(いちもんじわり)」「赤味噌(あかみそ)」「山崎(やまざき)」「離れ山台地(はなれやまだいち)」「小敷沢(こじきざわ)」「長山(ながやま)」「潟(かた)」「上苗代(かみなわしろ)」

2) 大字小豆曽根

小字…「才の神(さいのかみ)」「島の内(しまのうち)」「草薙(くさなぎ)」「餅田(もちだ)」

3) 大字北曽根…「蔵地面(ぞうちめん)」「大勢町(おおせちょう)」「塚田(つかだ)」「七十地(ななじゅうち)」「日光畑(にっこうばた)」「野手(のて)」「松ノ木 (まつのき)」

4) 大字敦ケ曽根 (つるがそね)

小字…「太屋敷(たやしき)」「山屋敷(やまやしき)」「蓮田(はすだ)」「五十地(いそじ)」「馬場田(ばばだ)」「土手下(どてした)」「八ケ村溜(はっかそんだめ)」

(4) 小 結

京田遺跡周辺の地名について小字名，俗称名を中心に述べてきた。まず「兵吾田」「垣の内」のように古代役所跡をうかがわせる地名が残っていることがわかった。また「京田」「小屋場」「おくら」「大仙坊」のように関連が想定される地名もある反面，「鳥原田」のよう

に不明のものもある。

また，京田遺跡とその周辺の地名から次のようなことがわかった。それは遺跡地を含め竹森地区が，北は釜谷，前谷地，東は江向を隔てて北曽根沖，南は横滝山の落ち込んだ八ケ村溜，大溜，古溜，谷地，そして西は島崎川，潟，川中瀬，津々場等四囲を川や低湿地の地名に囲まれていることである。しかも全体が微高地であり，豊かな水源もあることから，公共施設の立地条件も整っていたものと思われる。（第21図参照）

しかし，この地名調査もまだ緒についたばかりで，さらに古文書にでてくる地名，古老の伝承等によって，掘り下げた地名の解明に迫っていきたい。

おわりに，このたびの調査研究に御指導，御協力いただいた下記の方々に謝意を表したい。

寺村光晴先生（和洋女子大教授），小田二三男氏（竹森区長），竹内武氏（温古会会長），斎藤一郎氏（敦ケ曽根郵便局長），遠藤直英氏（寺泊町役場大河津支所長），小黒恒雄氏（大河津公民館主事）。

註

1　山中敏史・佐藤興治『古代の役所』岩波書店（昭59）
2　小林　存『県内地名新考』（昭25）
3　註２と同じ
4　「志駄文書」『越佐史料』による。
5　宮田貞治郎記述，小田二三男編『竹森史』（昭44）
6　駒見和夫「古墳調査」『寺泊町史研究Ⅱ』（昭61）
7　註５に同じ
8　竹森区長蔵『松山林山割野帖』（文化15年）
9　「横滝山廃寺跡発掘調査概報（第１次調査）」（昭52）

（久我　勇）

Ⅵ　結　び

横滝山廃寺跡（寺泊町大字竹森）の発掘調査は，昭和51年から昭和59年に至るまで，４回にわたり実施され，既採集遺物を含めて，鴟尾，軒丸瓦，軒平瓦，塼仏等貴重な遺物とともに，木造基壇外装をもつ建物跡や総柱の建物遺構等を発掘した。この結果，現状では新潟県最古の寺院跡であることが明らかになった。

この調査は，横滝山の台地全面を発掘したものではなく，わずかな一部にしかすぎない。このため，台地上における遺構の全貌までは明らかになっていない。しかし，出土遺物や遺構にみられるそれは，この廃寺がきわめて重要な意味をもつことを示すものであった。そし

て，廃寺の性格と意義が関心の的となり，同時にこの寺院存立の在地基盤や背景が問題の焦点となってきた。その結果，横滝山の西・北側の山麓に展開している自然堤防上の古代遺跡が，横滝山廃寺との関係下に注目され浮上してきたのである。

このようななかで，すでに中島町長の序文や，第Ⅱ章発掘調査の経過中に記されているように，横滝山の山裾につづく京田，太屋敷，日光畑等の遺跡が，畑地改良事業の計画の対象となった。横滝山廃寺とこれら遺跡の関係が，前記したように当然のことながら重要な関心事となった。そして，今回の発掘調査に至ったのである。

調査の結果は，すでに前章までの間に詳細が記してある。なかでも，京田遺跡における溝SD 001（第1地点），SD 004（第4地点）と，建物跡と推定される SB 001（第5地点）に注目すべきものがあった。

SD 001は第1次調査（4月）において検出発掘されたもので，第2次調査（8月）ではその南端が西折するか否かを観察するとともに，その西側における遺構の存在有無確認を目的としたものであった。この結果は，溝は西折せず，さらに南に延びることが判明したが，南はすでに既成の県道土盛りによって発掘が不可能であった。SD 001の細部については前記されている通りであるが，ほぼ真北に走っている。ただし，検出の長さが短かく，かつ溝壁が若干攪乱等のため凹凸を示しているので，この方位については誤りがあるかも知れず，正確は期し難い。溝の北側の延長線上，すなわち越後線の鉄路をへだてた北方に試掘溝を設け，さらに溝の検出を心がけ，計測すべきであろう。しかし，本調査ではこの地域は調査の対象外であるため，そこまでには至っていない。ただ，溝の大きさ，形状，堆積，方位，出土遺物等の観察から，他の溝に比し，ある区域を画する，あるいは区画を意図した企画性のあるものと考えられた。

SD 004は検出長さが短いため，これまた誤りがあるかも知れないが，SD 001にほぼ併行する南北の溝と思われる。SD 004の検出が調査の終りころに当ったため，その南側にトレンチ（試掘溝）を入れることが，時間的にも作業労力上からも不可能であったのが残念でならない。

以上のSD 001とSD 004は，SD 001が後の溝によりかなり攪乱されていたものの，ともにある区域を画す溝と考えられた。そして，出土遺物から，およそ8世紀ころのものと推察された。

SB 001は，試掘溝の観察からは，地山面をカットし基壇状に整形した遺構と思われるが，発掘面積の拡大によっては構築された可能性も無視できない。南縁に小溝をもっている。基壇状のものの範囲は今回の発掘からは不明であり，柱穴様ピットも検出しているが，攪乱のため明らかでない。しかし，何等かの建物の存在を予察させるものがある。

以上の調査は，京田地区における検出であり，目的が遺構確認の調査であったため，全体を発掘することができず部分的確認にとどまり，その全貌を知ることができなかった。した

がって，それぞれの遺構の性格を明らかにするまでには至っていない。しかし，SD001，SD004を区域を画する溝とし，SB001をその内側における一つの建物遺構と考えれば，第Ⅴ章に久我勇氏が調査考察されているように，溝の西側が自然堤防あるいは微高地に当るので，この微高地にある一つのまとまりのある遺構群（単位）が存在するように観察される。すなわち，ある官衙遺構の存在が示唆される。そして，「ひょうご」「かきのうち」等の古代国衙跡に見受けられる地名が，その内に存在し，それが古代国衙関係の地名として許容されるものであれば，すでに寺村が別に述べているように（「越後国府の所在について一第三の越後国府一」宮栄二先生古稀記念集〈越佐の歴史と文化〉，昭和60年。「初期越後国府・越後城の所在について」小林武治先生喜寿記念論叢・国学院高等学校紀要第19輯，昭和59年）これらの遺構は横滝山廃寺跡と密接な関係をもつものであり，初期越後国府としての国衙域の存在を本地に推察することも可能となるであろう。

しかし，調査はあくまでも遺跡の一部であり，点のなかの点にしかすぎなかった。したがって，今回の調査からのみではこれら遺構の性格を明確にできないし，国衙域と断定することもできない。だが，遺構の存在が確認され，それが種々の状況から，ある予察を導き出す可能性を秘めたものであるという点，調査の意義は誠に大といわなければならない。

今次調査により判明した諸点を基礎・指針として，今後の調査に期待するとともに，より大きな成果がもたらされることを希求する次第である。　　（寺村　光晴）

発掘調査関係者

○発掘調査会

会　　長　中島甚一郎（寺泊町長）

副会長　当銀敏雄（寺泊町助役）

同　岡田吉衛（寺泊町教育委員長）

顧　　問　三浦佐太夫（寺泊町議会議長）

同　橋本健二（寺泊町議会文教民生委員長）

同　竹内武治（寺泊町議会議員）

同　近藤重治郎（　〃　）

専務理事　廣田廣四（寺泊町教育委員会教育長）

理　　事　寺村光晴（発掘調査団長・和洋女子大学教授），中川成夫（新潟県文化財保護審議会委員・立教大学教授），甘粕健（同・新潟大学教授），家合俊雄（寺泊町収入役），納谷一徳（寺泊町総務課長），小田二三男（三島郡北部土地改良区理事長），丸山啓一（敦ケ曽根区長），河村佐一郎（北曽根区長），山田庄平（竹森農区長），西潟皓夫（敦ケ曽根農区長），丸田喜八郎（北曽根農区長），石井象一郎（新潟県立寺泊高等学校長），水戸公四郎（寺泊町文化財調査審議会委員長），斎藤一郎（寺泊町文化財調査審議会委員），近藤丈夫（同），矢尻一雄（同），吉井日佐男（同），竹内武（同），小

黒三喜治（同），山崎龍教（寺泊町社会教育指導員），小林武義（大河津公民館長）

事務局長　長井正雄（寺泊町教育委員会事務局長）

事 務 局　田中正徳（寺泊町教育委員会社会教育係主事），小黒恒雄（同）

○発 掘 調 査 団

第１次調査

団　長　関雅之（県立新潟高等学校教諭）

団　員　本間信昭（新潟市立入船小学校教諭），富田和気夫（新潟大学学生），岩崎均（同）

顧　問　中村孝三郎（越後古代文化研究会会長）

協力者　駒形敏朗，㈲伊藤組

第２次調査

団　長　寺村光晴（和洋女子大学教授）

団　員　久我勇（柿崎町立黒川小学校校長），駒見和夫（滑川市立早月中学校教諭），面手勝仁（立正大学学生），細口喜則（同），破入武夫

顧　問　中村孝三郎（越後古代文化研究会会長）

参加者　寺泊町立大河津中学校生徒

遠藤直樹，遠藤文康，小潟和春，池浦伸二，山崎一樹，大久保あゆみ，佐藤八千代，宮田美春，村山朋子，小田浩志，菅沼善幸，小田雅之，佐藤彰，渡辺修治，佐藤みゆき，中島華織，早川和美，本間貴久，吉原誠，富田誠，山田高行，渡辺章憲，山崎誓子，長谷川泉，藤田布子

新潟県立寺泊高等学校生徒

破入武夫，大宮紀彦，大橋賢紀，和田清治，関本幸雄，本間武男

○発 掘 協 力 者

大字竹森（区長・小田二三男）

地　主　小田二三男，佐藤義房，星勝益，渡辺重一郎，深谷昭三，近藤行夫，鈴木清，本間光一

○発掘調査団事務局（寺泊町教育委員会）

長井正雄，田中正徳，小黒恒雄

○お世話になった方々

文化庁，新潟県教育委員会，寺泊町，寺泊町教育委員会，大字竹森，大字敦ヶ曽根，大字北曽根

中島栄一，岡本郁栄，戸根与八郎，駒形敏朗，藤田治雄，若月正光，藤巻正信，高橋保，坂井秀弥，寺崎祐助，国島聡，品田高志，神林昭一，内田昭一，本間荘三，三松亭（山田孝平）

（以上順不同）

あ と が き

昭和61年の春・夏に行われた京田遺跡他の確認調査は，横滝山廃寺を支えたとおもわれる建物の基壇の一部や，その建物をとりかこむ遺構の一部と思われるものなどが確認され，大きな成果を収めることができました。

そして，ここにその概報が刊行されましたことに対し，改めて今調査に寄せられた関係各位のご尽力を謝すとともに，深く敬意を表する次第であります。

昭和51，57，58，59年度の四次にわたる横滝山廃寺跡発掘調査により検証され，全国でも稀有な木造基壇外装をもつ建物跡，塼仏片などの遺構・遺物等により，横滝山にひときわそびえる古代寺院の姿が霧のなかから眼前に浮かんでくる思いがいたしておりました。ところが，昭和60年の夏実施した横滝山周辺遺跡分布調査により，灰釉陶器片，珠洲焼などの中世陶器が採集，確認されるにいたり，横滝山廃寺跡の性格，規模を究明する上で周辺遺跡としての京田・太屋敷・日光畑などの重要性が一層高まってまいりました。

今回の調査の主なねらいは，畑地改良事業が実施されるに及んで，本遺跡の地下に眠っていると思われる遺跡の性格，遺跡の範囲などを確認するために実施されたものであります。

お陰様で，京田遺跡他の確認調査は成功裡に終りました。

横滝山廃寺跡および周辺遺跡の発掘調査はこれで完了したわけではなく，ここに秘められた全容の究明のためには，まだまだ相当の日時を要するものと思われます。そして，ここに眠る古代史の謎がひとつひとつ解明されて行く過程の中で，古代史へのはてしないロマンがつのるばかりなのであります。

古い歴史をもつ寺泊町はもとより，新潟県の古代史，さらには広くわが国古代史の解明のために，本調査報告書が役立つことがあれば関係者一同幸いと存ずる次第であります。

昭和62年３月

寺泊町教育委員会

教育長　廣　田　廣　四

図　　版

京田遺跡全景（西〈上段〉から東〈下段〉へ順に望む）

1　京田遺跡（遠方の森は横滝山）

2　京田遺跡の発掘（南より）

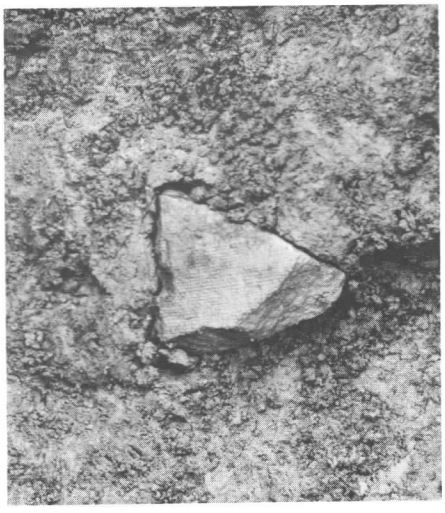
1　京田遺跡溝状遺構（左:SD 001，右：SD 002）

2　溝状遺構断面（南より）

1　京田遺跡第２地点（左:第３号トレンチ，右:第４号トレンチ）

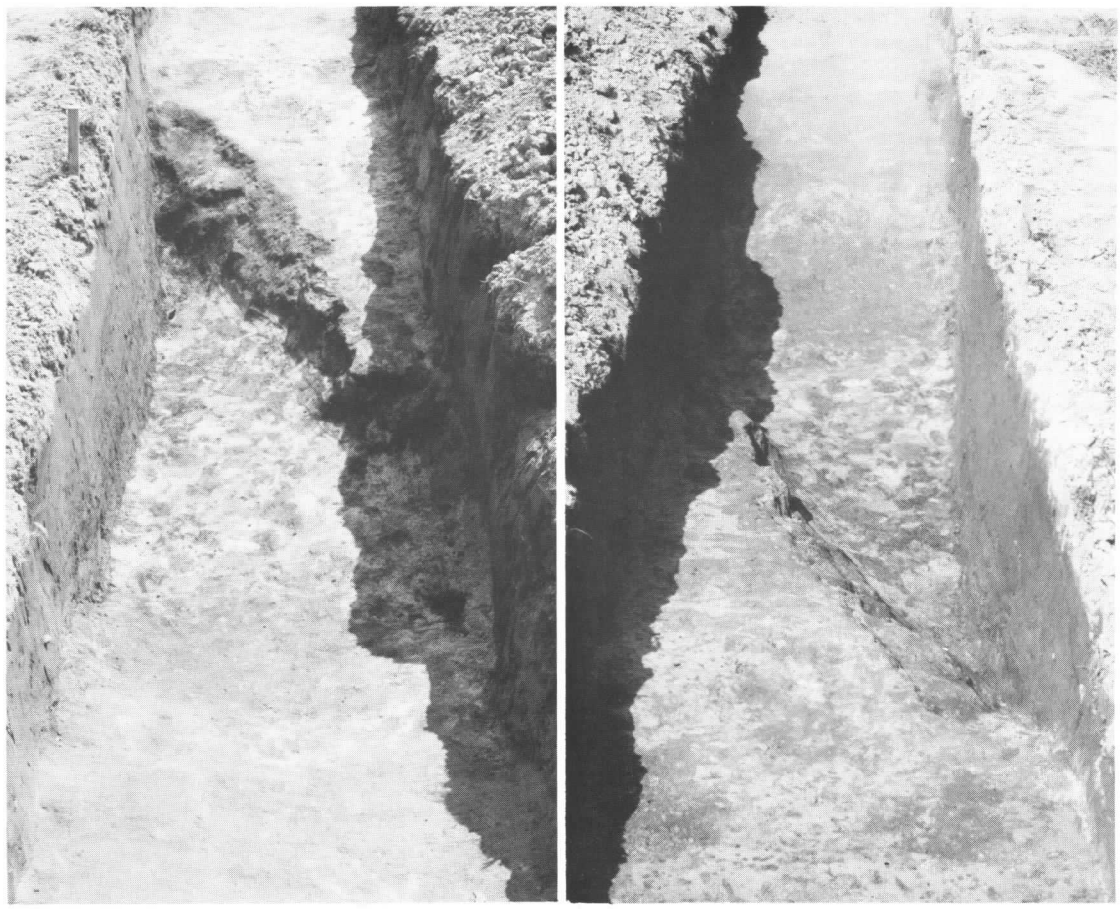
2　京田遺跡第３地点（第５号トレンチ）

3　京田遺跡土坑（SK 001）



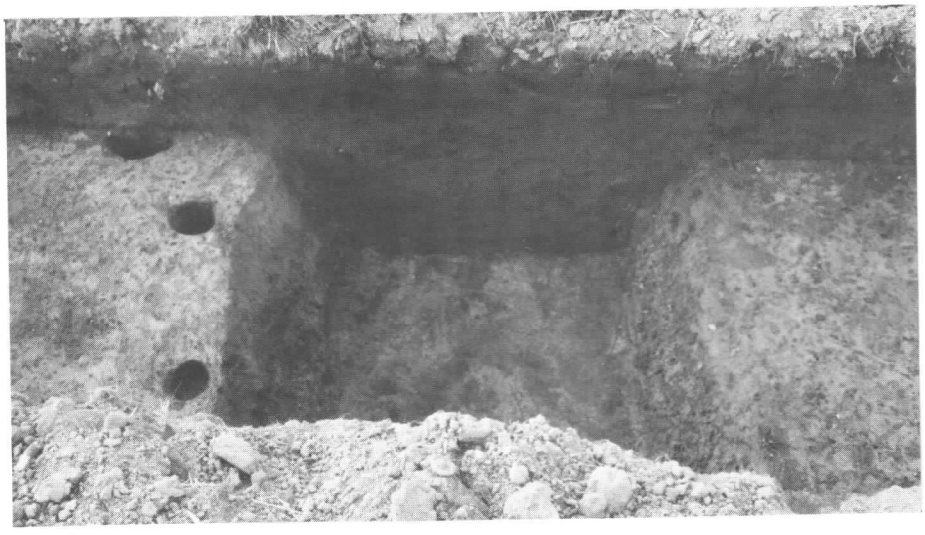
4　京田遺跡布目瓦の出土

京田遺跡第４地点（西から東を望む）

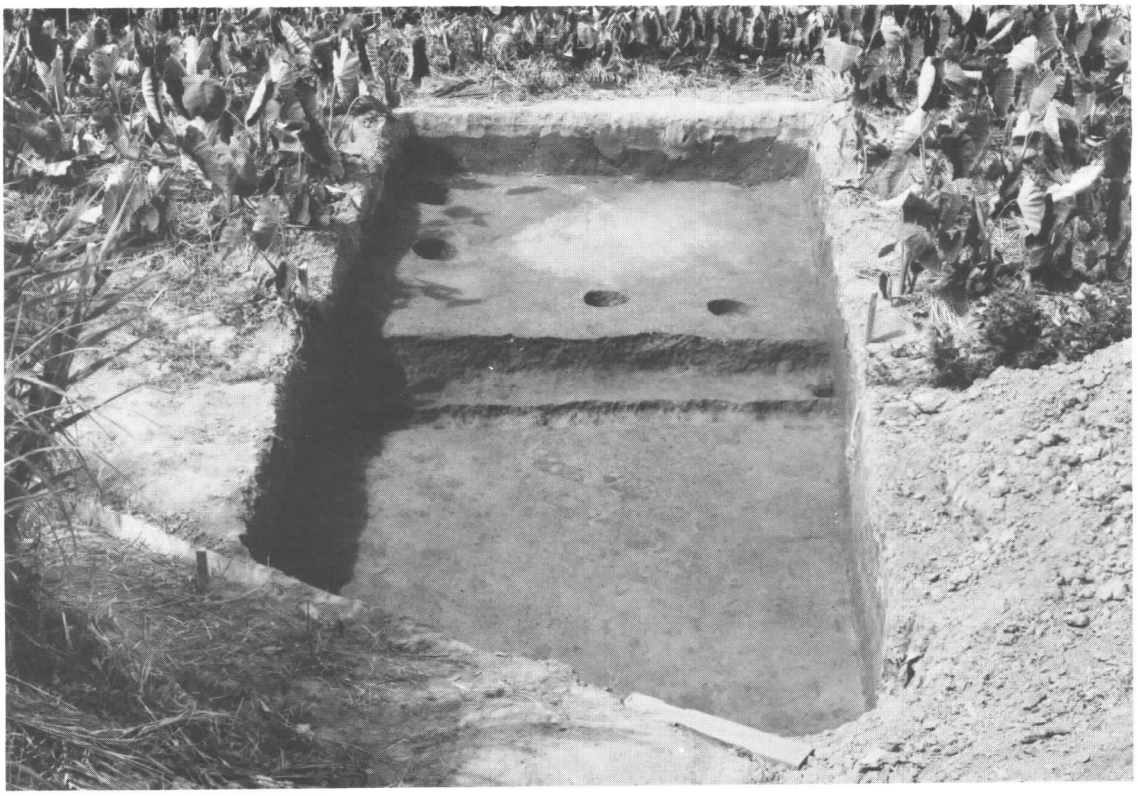


1　京田遺跡第4地点土坑状遺構（SK002）　左:東より，右:西より

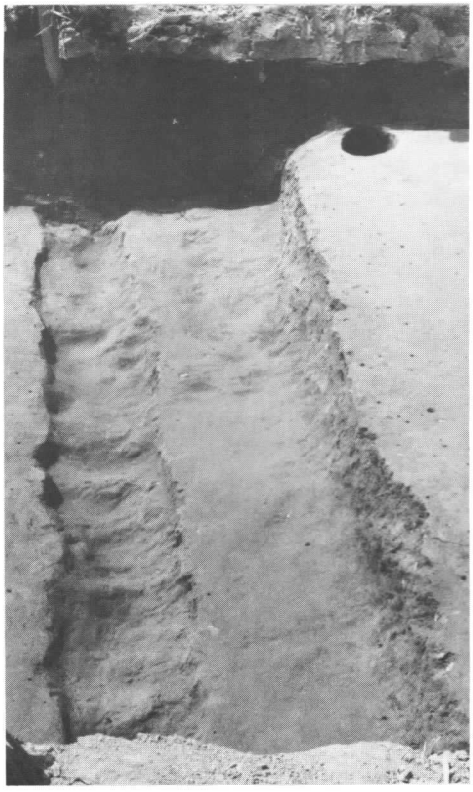
2　同上遺物出土状態



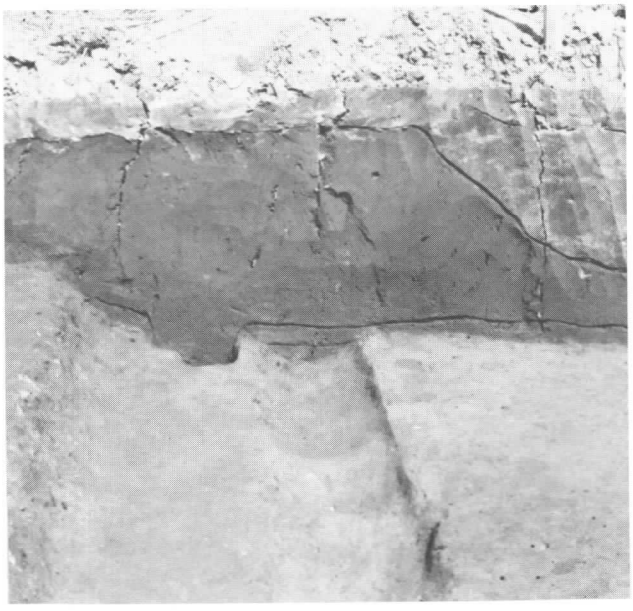
京田遺跡第4地点溝（SD004）



1　京田遺跡第５地点(SB001)　南より



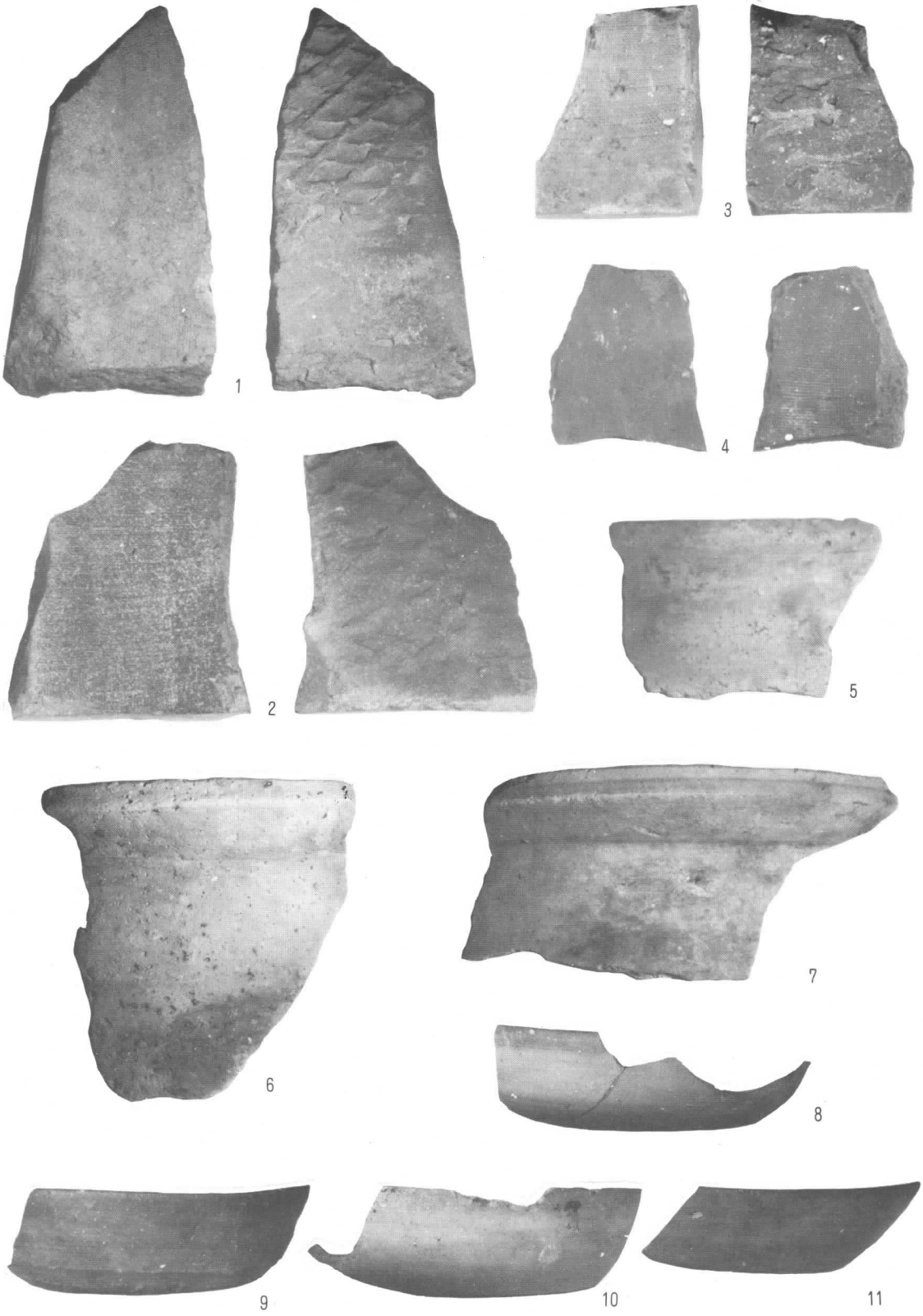
3　基壇状遺構(SB001)の南辺　東より



2　基壇状遺構(SB001)南辺の東壁

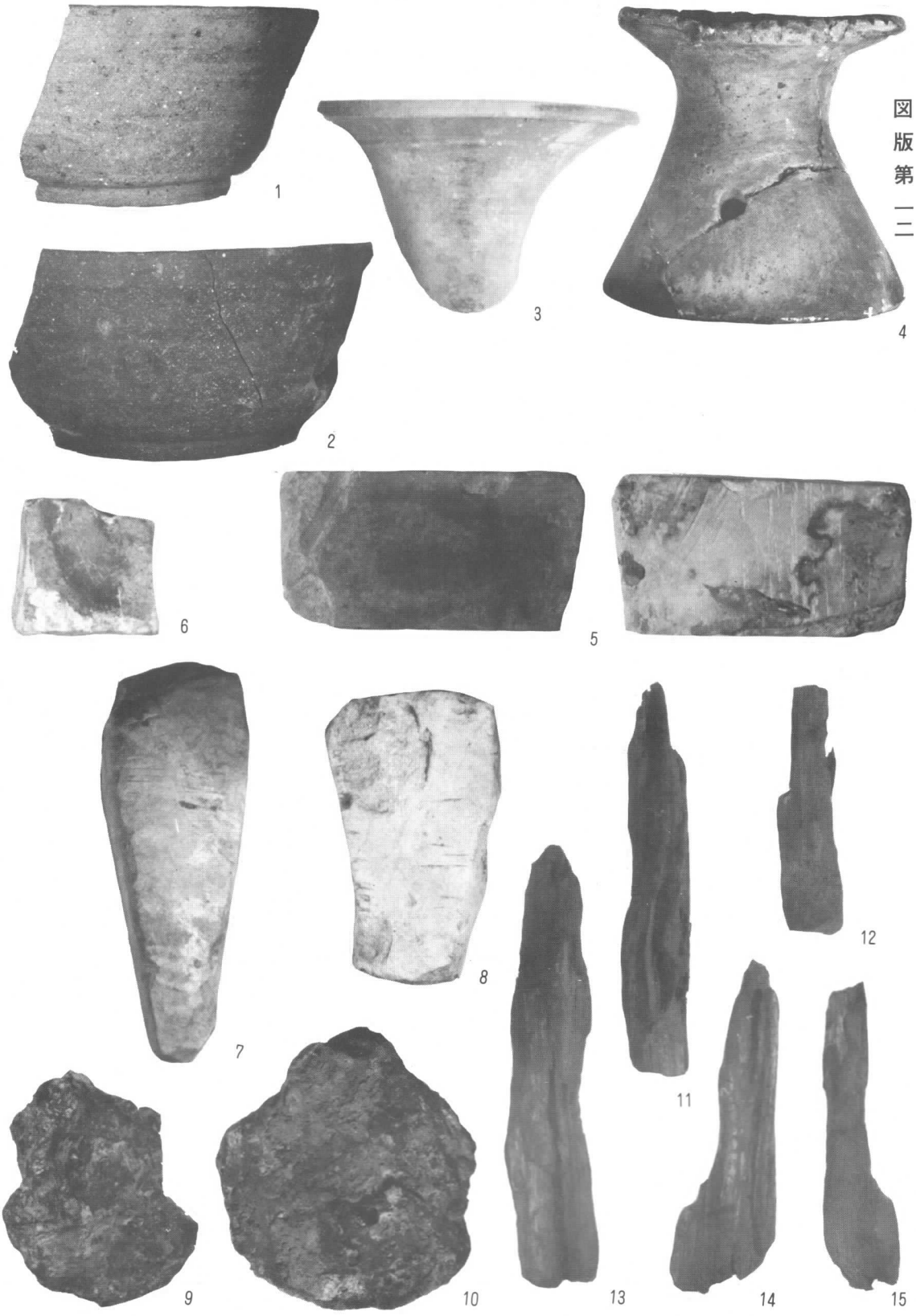
太屋敷遺跡全景（上:西より）とトレンチ

日光畑遺跡全景（上:北西より）とトレンチ



出土の遺物(1)

平瓦（1～3），丸瓦（4），土師器（5～7），須恵器（8～11），〔縮尺　1～4：¼，5～11：⅓〕



出土の遺物(2)

須恵器（1～3），古式土師器（4），石製品（5），砥石（6～8），鉄滓（9・10），木片（11～15），〔縮尺　1～4：⅓，5：½，6～15：¼〕　出土地点は本文参照

京田・太屋敷・日光畑遺跡発掘調査概報

—— 昭和61年度 ——

昭和62年3月31日

発行　寺泊町教育委員会
新潟県三島郡寺泊町

印刷　有限会社　めぐみ工房
新潟県長岡市千場1－2－17